

【翻 訳】

日本に初めて来たスウェーデン人 フレデリック・コイエットの人生 (2) —— (原作) ゲンナル・ムレーン ——

延 岡 繁*

第4章 再びの江戸参府へ

フレデリック・コイエットは無事バタヴィアに到着した。そして、直ちにバタヴィア総督フランソア・カロン⁽¹⁾と面頭向かって日本の長崎出島商館での活動経過報告を話さねばならなかった。総督は彼の報告を聞いて満足した。日蘭関係が複雑怪奇にこじれ合ったので、誰が手懸けてもコイエットが成し遂げた以上の成果は上がらなかったことが明白であったからである。日本側が手ぐすね引いて仕掛けた罠にコイエットは決して捕まらなかったし、日本側が下心して提出した質問に対し、彼は熟慮の末、会社の立場から見て、最善と思われる返答をしていた。そして、総督は心痛と苦勞の多かったコイエットの仕事への特別な感謝の印として、彼の給料を月額150フロリーンへと増額した。

そして、オランダ東インド会社として、10人のオランダ人の生命⁽²⁾を救ってもらった特別なお礼を日本の皇帝(将軍)に述べるために、直ちに日本へ特使を送ることを総督は決定した。早速に理事会を開いて協議した。バタヴィア総督フランソア・カロンは日本人の心情を理解する鋭い感覚と秘密の島国

* 人文学部教授 — 比較宗教学・比較言語学

日本を知る深い知識を多く持ち合わせていた人間だが、何としても、特使の人選には苦慮した。カロンは日本人たちが商人を軽蔑していることを知っていたので、もしも貴族出身者とか、新鋭の学者とかを江戸へ送り込めば、日本側もオランダ側の誠意を感じ、従来とは変わった態度で対応し、頓挫状態の外交関係も善処の糸口が開けると考えた。そして、幕府への恒例の贈呈品も、船員無事保釈の感謝の気持ちを十分に表す、例年より更にすばらしい品々を考慮する必要をも感じていた。

しかし、オランダ貴族の誰かを説得し、日本の長崎出島の商館長になってもらうなどということは絵空事としか思えなかった。その代わりとして、当代切っの法律学者で、法学博士という肩書きを持ち、バタヴィアのオランダ系ラテン語学校の校長をしていたペーテル・ブローックホビウス氏に白羽の矢が飛んだ。そこで、月給80フロリーン⁽²⁾で、オランダ東インド会社日本支社長兼オランダ王国駐日大使という金メッキのような軽薄な名誉を上塗りして招聘した。しかし、この老学者は、何としても身体が脆弱であり、病氣持ちであった。それで地の果ての日本までの長旅に果たして耐えられるだろうかという心配があった。しかし、彼に代わる適任者など、どこを探しても見付からなかった。

しかし、あの手この手で、やっと見付けたブローックホビウス氏は体調は優れず、商業に携わって大金を儲けたなどという経験も全くないことを考慮し、実務担当者を常時付随させることとした。それには商館長としてアンドリュース・フリシウス⁽⁴⁾と出島へコイエットの後任者として既に赴任したデリック・ストロークの2名をあてがった。

さて、日本への贈呈品の選定は人事に比べれば比較的簡単であった。皇帝(將軍)⁽⁵⁾が大砲とか鉄砲など武器に非常に大きな関心を持っていることが判っていたからである。そこで、ブローックホビウス大使には、最新型の40ポンド大砲2台(門)をオランダ東インド会社よりの謙遜な意味での贈答品⁽⁶⁾という名目で江戸まで届けることが決定された。

その上、更に2名の者がバタヴィアから派遣される事になった。日本人にこの大砲の装填方法と砲弾発射の技術を伝習するためである。つまり、「砲術

教習と納品時の試射の事」と商館日記には記録された。先ずは「玉つめ」に選ばれたのはユリアン・スヘーデル（ヨーハン・シェドレルの方が原音に近いが、本書では人名、地名などできるだけ混同を防ぐ意味で日本での慣用に従う）というスウェーデン人で、彼は歴史的には2番目に日本の土を踏んだスウェーデン人となった。⁽⁷⁾

総督のフランソア・カロンは自分の経験に照らし合わせブロックホビウス大使の日本滞在中の諸注意を細々と教え込んだ。カロンはオランダ人たちには向かって、「極力、自制自重し、余計な無駄口は決して叩くな。そして、日本人に質問されたら、できるだけ言葉少なく『ギリシアの諺にある如く、誤解される雄弁（銀）よりも沈黙の黙認（金）を得たラコニア人の様に』要領よく答えよ。また、『偉そうに自慢をしていると相手に思われそうな言動は絶対に謹め。そして、慇懃な態度の中にも品性だけは決して失うな。日本人たちは諂（へつら）いや御機嫌とりに踊らされるような馬鹿な人種では決してないのだ』などと語った。そして、傍目にも哀れなるかな、ブロックホビウス氏は皇帝（将軍）に会見した際に語るべき「御挨拶と御談判」を日本語で丸暗記させられた。更に、総督カロンはブロックホビウス氏に皇帝（将軍）が出すかも知れぬ質問をあれこれとたくさん想定し、それらに対する「的確な速答」の練習も行なった。もし、日本側が「オランダはポルトガルと停戦したそうだが」と質問するなら、ブロックホビウス氏は「それは単にオランダとポルトガルの2国間だけの取り決めではなく、ヨーロッパの全キリスト教国が、戦争に倦み疲れ、平和を熱望した結果なのだ」と答えるべきだと言った。

カロンは大使が「上流階級で名誉ある人物」に徹することを願望した上に、更に、個人的なことだが、と断わった上で、衛生上の諸注意まで言い伝えた。例えば、「絶対に爪を長く伸ばさぬこと。いつも髪の手には櫛を掛け、整髪していること。常時、清潔な衣服を着ること。毎日数回は身体を洗うこと」等々であった。

日本人が西洋人に出会って顔と顔を突き合わせた時、西洋人とは鬼のように恐ろしい顔をした異様な人種である上に、鼻を衝く悪臭ぶんぶんたる悪臭の人種であると考えてるのである。日本人は毎日、（西洋人からすると異様な）

高温な熱湯に入り、身体を洗い、汚れと悪臭を洗い流す習慣があるが、一方、当時のオランダ人には残念ながらそのような衛生観念は全く無かった。いや、バタヴィアという熱帯地方に住むオランダ人たちは熱風に蒸し吹かれていても、北国の故国から持って来た部厚い黒服を着て過ごし、更に住宅を開け広げて涼風を吹き通すことすらを拒んでいた。また、入浴は身体に悪い習慣であると思い込んでいた。

先にも述べた、ユリアン・スヘーデルが装填発射して日本人の度胆を抜こうと企んだ40ポンド大砲の他にも、皇帝（将軍）への贈答品は今回はたくさん取り揃えられた。その中には、双眼鏡、鏡、銀製の模型軍艦などがあった。朝廷（幕府）の高級役人や政治的に影響力の強い人物がカロンの手渡しした比較的小さな贈り物でもよく覚えていたからである。例えば眼鏡、磁石、布（特にピロード）、拡大鏡、世界地図などである。

また、日本とオランダの外交関係がこじれたにも拘らず、当方の非を許し、大使を皇帝（将軍）に謁見までして頂いたお礼を心底より、特に仲介を執られた筑後殿⁽⁸⁾に送るようにコイエットは大使に申し伝えた。

1649年6月28日、ブローックホビウス大使はバタヴィアより出帆した。⁽⁹⁾しかし、この老博士の健康は見るも哀れに弱々しかった。そして、この大海原を猛り狂う荒波を越える長旅に耐え得るだろうかと言ひ及ぶが、誰しもが無言で窺（うかが）った。万一の場合にはアンドリュース・フリシウス⁽¹¹⁾が全権を掌握し業務を代行することが内定していた。オランダ人はこのように実務計算に長けた人種である。しかし、この時のこの場合、確かに彼は博学多才な法学博士かも知れぬが、既に歳を老い、病苦にあえぐ脆弱な学者を地球の裏側まで引きずり廻すことが日蘭貿易にどれ程の効果と増収があると計算したのであるか、結局は誰が儲かると言うのであろうか、疑いたくもなる。オランダ東インド会社はこのことだけに対しても相当な金を浪費したことであろう。航海の途上で死亡した博士を何の役に引き立てる積もりだったのであろうか。首席随行員フリシウスは老博士が万一、航海の途上で死亡するような場合に実際にどのような処置を施すべきか、ドイツ人医師カスパー・スハームベルヘル（カスパー・シェームベルハー）により遺体の芳香樹脂加工法、つまり

「ミイラにして保存する方法」を伝授教習させられていた。また、貨物室の積み荷の中にマホガニー材で麗々しい装飾をあしらって作った棺桶が一体積まれていた。そして、万一の場合でも遺体を麗々しく納棺し、長崎到着後に日本人官憲（役人）たちに見せびらかし、オランダ政府がいかに偉大な人物を特任大使として人選し、日本に派遣したかということを認知させる必要があった。

1649年8月16日、ブロークホピウス氏が死亡した。その後、約1ヶ月経って船は長崎に到着した。首席随行員フリシウスは教えられた通り丁寧に遺体を処理した。まず、死者の爪を切り、手を洗い、遺体を芳香でミイラ状に処理して保存した。それを2名の長崎の県知事（長崎奉行）に表敬訪問してもらい、披露した。（長崎奉行は）遺体のブロークホピウス氏が大使の礼服をまっていたことにより、彼に対して特別な例外処置を許可した。それは彼の葬儀を地上で、つまり長崎出島で挙行する許可を出した。それ以前も、以後も、他のいかなる人物であっても出島での死亡者は遺体を海に投げ捨てる水葬にしか臥せられなかった。

1649年12月31日、フリシウスは商館長ブラウクホルストと共に長崎から江戸参府の旅に出掛け、やっとのことで江戸に到着した。そして、2年前にフレデリック・コイエットが寒さで震えていたと同じ旅館に投宿し、皇帝（将軍）謁見の許可を待ちわび、長々と3ヶ月間をそこで過ごした。日本のお役人たちはオランダ人たちに対し友好的ではあったが、何をするにも時間が掛かり、とにも角にも待ちに待たされせたのが辛かった。特にこの時の謁見が遅れたのは皇帝（将軍）の病気が原因であった。時の皇帝（将軍）はコイエットの時と同じく、あの切支丹弾圧を熱狂的に推し進めた家光⁽⁹⁾であった。結局、将軍家光の謁見は行なわれなかった。

しかし、翌年（1650年）4月7日オランダ使節は江戸城に召喚された。彼らと面会した人物は皇帝（将軍）ではなくて、軍事政権（幕府）の要人たちであった。

すると辺りの雰囲気が一度に、しかも、オランダ人たちが驚くほどに、非常に友好的なものへと変わってしまった。そこでユリアン・スヘーデルと彼

の助手の出番となり、40ポンド大砲を庭の片隅に装丁し、弾丸と弾薬を挿入し、点火発砲した。将軍も幕府の要人たちもこの贈り物の政治的な意味を即座に理解したようであった。

日本全国が統一国家となったのは歴史的には相当に以前であったのだが、(当時の)日本には未だ中央集権的な性格、特に一人の人間に莫大な権力が集中され、制御される政治体制が動いていた。(当時の)近代科学が集約されて発明された40ポンド大砲は封建時代の象徴であった江戸城の石崖を崩してしまった。しかし、それが中央集権的な政治体制を崩すには至らず、日本の近代化にはまだまだ時間が掛かった。

その後、オランダ人たちは豪華な返礼品を受け取り、華麗な会食会に招かれた。その席で日本人たちがいろいろと質問を寄せて来たが、フリシウスはカロンの言い付けに副って返事をした。日本側の話(の要点)は、もし、オランダ人が、以前に日本側と結んだ協定の義務を履行さえすれば、今後とも全てが巧く行くと言うのである。そして、離別に際し、ユリアン・スヘーデルと彼の助手をしばらく江戸に残しておき、日本人砲撃手たちに40ポンド大砲の装填術と発射術を教えて欲しいと言ってきた。特にスヘーデルは日本人の間で人気者となった。その理由は、彼の人格が温厚な上にも、腕の良い砲撃の名人であることでもあったが、同時に、彼は軍人である。つまり、当時の日本の社会階級の上位の武士に相当する身分の者であり、当時、日本人が軽蔑する守銭奴のオランダ商人とは別種であることにも由来した。⁽¹²⁾ そのために江戸のサムライたちはこのスウェーデンの戦人(いくさびと)を一段と高く評価したのである。⁽¹³⁾

1650年11月14日に、日本人砲撃手たちに大砲の装填術および射撃術の伝授を終わりユリアン・スヘーデルは助手と共に出島に帰って来た。休む間もなくスヘーデルはオランダ船に乗り、バタヴィアに戻った。当然ながら彼が江戸参府旅行で日本側から貰った高価な贈り物⁽¹⁴⁾も運ばせた。その後、直ちに彼はオランダ東インド会社を辞職し、故国スウェーデンへ舞い戻った。そして、その後、彼はスウェーデン海軍に奉職し、後には海軍元帥にまで昇進した。

ブロークホピウス氏を大使に起用した事は結果的には会社は10万フロリンの無駄金を払ったのみであった。当時の10万フロリンは莫大な費用でもあった。⁽¹⁵⁾しかし、莫大な金を払ってでも、この様な人物を起用した意図は、こじれにこじれ切った対日関係を善処し、何としても利潤が高い日蘭貿易を再開し、活発にすることであった。そして、苦勞の甲斐があって、その目的は何とか達成できたのである。それどころか、この航海が切っ掛けとなり、その後の、日蘭両国の貿易関係が更に改善されるような鑄型が流し込まれたのである。つまり、この年から四名の日本人が出島にやって来て、オランダ商館の医師カスバル・スハームベルヘルの元で西洋式の医学の勉強をすることになった。⁽¹⁷⁾これ以降、出島に来た医師は知識欲の旺盛な若い日本人たちに医学のみならず博物学⁽¹⁸⁾を教えることが伝統となった。このスハームベルヘルの大学に、これより100年後に植物学者リンネの弟子のツンベルグ医師⁽¹⁹⁾がやって来て、「日本植物誌」を刊行した。長崎の街には彼の記念碑が立っている。⁽²⁰⁾

さて、バタヴィアに帰ってからの、「フレデリック・コイエットは幸福な日々を送っていた」と書くのが正しいであろう。彼は初めて来訪した日本での生活をよく思い出した。彼は、苦況に遭遇した時、正しい判断を下したことから、周囲の人々の絶大な信頼を勝ち取ったのであった。その頃、(正しくは1649年11月20日)⁽²¹⁾それは兄、ペーテル・ユリウスと共に彼にもクリスチーナ女王が爵位を授与したという吉報が故国スウェーデンから届いた。それは再び江戸参府をする時、貴族の爵位を持った者として、どこで誰と会おうが自信を持って立てると思った。「麗しのスザンナ」との結婚生活もうまく行っていた。1652年10月6日、彼女はバタヴィアで彼の男の児を生んだ。名前はバルタザル・フレデリックと命名された。しかし、この日、この時、フレデリック・コイエットは日本へ向かう船旅の途中であった。

1651年の秋、スヘーデル氏とステルテミウス氏が出島での職務を無事に終わったのでオランダ東インド会社はオランダの貴族出身のアドリアン・ファン・デル・ブルフを新たに島商館長に任命した。このファン・デル・ブルフはスウェーデン出身の若者オーロフ・エーリックソン・ヴィルマンを日本

までの航海中は海軍軍曹⁽²²⁾として、また、出島到着後はコック⁽²³⁾として同行させた。ヴィルマンは幸いにも、コイエットやユリアン・スヘーデルと同様に、新商館長が江戸参府した際に道中を同行し、將軍謁見の時も同席が許された。彼は正規の大砲撃手ではなかった⁽²⁴⁾が、元来、器用で機転の効く人間らしく、必要や要請があればことごとく上手にやりこなしていたようである。そのような訳で彼は数回も宮廷（幕府）に招かれ、日本人たちにオランダ製の地図や地球儀を使って世界地理を教えたりもした。その他、オランダ出島商館から運んだ極上の贈り物であった武器や兵器、それは臼砲、迫撃砲、火炎砲、手榴弾、地雷、野砲などの操典法の実際を教えた。⁽²⁵⁾

將軍に仕える大総理大臣⁽²⁶⁾が江戸城の庭の一隅で彼ヴィルマンに大木を大砲で撃てと命じた時、彼はその大木に弾丸を命中させ、木端微塵に粉碎した上に、後方の石崖も崩してしまった。それを目撃していた一同は驚きの歓声を高らかに上げ、彼の腕前にも驚嘆した。⁽²⁷⁾將軍は早速、（その夜）宴会を開き、オランダ人貴族の商館長ファン・デル・ブルフよりもスウェーデン人のヴィルマンの方に好意を示し、側に座らせ、酒を酌み交わして感謝したため、多少とも嫉妬を買ったようであった。⁽²⁸⁾

ヴィルマンによれば、このようなオランダ人を出し抜く外国人に対して、オランダ人たちは嫉妬し、意地悪をしたりしたらしい。それ故にだろうか、ユリアン・スヘーデル（ヨーハン・シェーデル）は早々とオランダ東インド会社を辞め、スウェーデンへ帰国し、故国の海軍の駆逐艦の船長に落ち着き、スウェーデン人として初めて日本に関する本の著者⁽²⁹⁾にもなり、スモーランド県ウッシュフルトの美しく色香るりんごの花咲く館で晩年を過ごしている。

1652年の4月30日⁽³⁰⁾にコイエットは出島の長崎商館長に再び任命された。2回目の日本就任は（前回に比べると）状況は非常に良くなっていた。だから、前回（1648年）の時のように、皇帝（將軍）には、鼻先にかざされただけで、難癖を突き付けられてあしらわれることがなく、顔と顔を突き合わせて会見したいものだと彼は願った。アドリアン・ファン・デル・ブルフの館長在任の時の江戸参府で日本側がオランダとの通商条約の制限期限をコイエットや次

のストロークの期間にまで伸ばしてくれていた。

1652年11月3日、コイエットは2度目の出島上陸をした。コイエットは(前回の訪問時の)1647年から48年までの商館長日誌は全く無味乾燥に記入している。それは彼が全ての事を厳しく取り締まり、彼が非常に劇的な(=危険な?)状態に置かれたていたことを実証しているのである。それに比べて、今回、彼の書いた商館長日誌を閲覧してみると、商館の貿易商売のこと以外にも、彼の生活の周辺で起きた一般的なことにも関心を抱いて来たことが読み取れる。彼の江戸参府紀行に関しても、幕府とのやり取りのみならず、他のいろいろなことも書いている。そして、日本人の日常生活にまで関心を持って書いている。それは、鎖国時代の真只中で西洋人があまり見ることができない珍しい物事を見聞して書いているので二重の価値がある。

コイエットは日誌の中に、しばしば(西洋では)未知のものを取り上げて書いている。また、タタール族が満州地方⁽³¹⁾を占領し、更に明王朝の存在を危ぶませていることや、その背景には明王朝末裔と自称するロマンチックな軍閥「一官」(Iquan)と彼の碩学な息子「国姓爺」(Koxinga)がおり、ある日、彼は孔子(儒教)の礼服を焼き払い⁽³²⁾直ちに戦に赴(おもむ)き、数々の戦勝を上げ、当時、最強の軍人と言われた。しかし、彼の愛国心のために、祖国(中国)が満州タタール族に占領されると、彼らが押し寄せてこない南方へと活動範囲を移してきた。そして、彼は(当時)オランダが領有していたタヨワンに押し寄せ、そこに満州タタール族攻撃の軍事基地を作ることが噂されていたとコイエットは書いている。

コイエットは特に一官と国姓爺のことを注意深く調べ、本当に台湾⁽³³⁾占領を計画しているのかどうか、また、オランダ東インド会社はどう対応すべきかなどを論じている。⁽³⁴⁾このような宿命的な対決のために何ら軍備や物資の備蓄をしていないことをコイエットは強く指摘した。そして、このスウェーデン人コイエットはこの記録から十数か月後にタヨワンのゼーランディア城で敗戦の将として屈辱させられる運命の軌道を歩いていたことを残念にも知らなかった。

1652年11月9日の出島商館長日誌に將軍が強力な大砲や効果的な秘密警察

（目付け）を所持しているにも拘らず、国内の治安維持に不安を抱いていることを書いている。

「江戸では仕事がない多くの貧しい貴族や宮廷の職員（浪人や藩士たちのことか？）が街の4ヶ所に放火し、火事場泥棒を働いた。犯人たちは捕らえられ、犯行を自白したので、十字架に付けられて殺された。しかし、その中の二人は自分でハラキリをして切腹して自害し、武士である自分の名誉を立てた。」⁽³⁶⁾

1652年11月11日の出島商館日誌には国姓爺のことが記されている。

「一官の息子、国姓爺が彼の国（中国）でタートル族と戦闘中であるという（秘密）情報が届いた。各地から寄せられた（秘密）情報によると、近い内に国姓爺は台湾に向かって大行動（戦闘）を起こし、海峡を渡るであろうとの事である。おお、慈悲深い全能なる神よ！そこ（台湾のタヨワン）の民（オランダ人たち）に（必要なものを）備え与え給え！」

そこで、国姓爺の台湾襲撃作戦以上に現実的な作戦をコイエットは立てた。まず、オランダ商館は長崎で石（材）を購入し、それを船でタヨワンに運搬し、ゼーランディア城を更に一段と強固堅牢なものにするというのである。

しかし、この大事業は手に負えない難物だとコイエットは直ぐに見抜いた。彼は通訳たちの進言を上の方で聞いていたが、その内にオランダ船にそんな重いものを積み込むことが非常に多くの困難を来たことが判ってきた。そこで、その仕事は彼とオランダ船員が責任を持つことにして中止したが、その本当の理由は他にもあった。

1652年11月20日の出島商館長日誌には：

「（日本の役人たちは）こんな多くの石を運ぶからにはキリスト教の会堂を建設するのであろうと疑ってきた。わたしたちがこの事業⁽³⁶⁾をしていることが長崎県知事（奉行）や彼の側近の耳元に中国人商人から囁かれたことであろう。彼ら（中国人商人）のある者は実際にバタヴィアにも出掛けておりキリスト教の会堂が彼の地に建設されていることを見て知っていた。通

訳たちはお役人に何を聞かれても知らないと言い張ったらしい。これはわたしが出島の通訳たちに好感を抱いた最初である。この質問⁽³⁷⁾は更に大きな意味を持っていた。」

コイエットの頭には、この問題がこびり付いていたらしく、1週間程過ぎた、同11月29日の出島商館長日誌に、また蒸し返している。

「中国人たちがタヨワンのオランダ商館のありもしない悪評を撒き散らそうと策動している。」

しかし、出島商館長として赴任してきたコイエットには江戸参府という大任が待ち構えていた。前回、彼が江戸に上った時に将軍家光が死去し、彼の10歳ほどの息子が将軍となっていた。江戸への旅行は彼にとって特別なものではなかった。到着後の問題の解決の方が更に重要であった。1953年1月15日の出島商館日誌を見てみよう。

「午後2時に皇帝(将軍)の住んでいる首府江戸に到着した。早速、到着の報せを筑後殿⁽³⁸⁾と江戸の知事(奉行)義家殿に届けた。通訳は義家殿の自宅(お屋敷)を訪ねて行って、お会いした。彼は到着歓迎の挨拶と共に、皇帝(将軍)の母堂が1月1日⁽³⁹⁾に他界したことを通知してきた。それで、わたしは長期の滞在となるかも知れなかった。わたしの行動は筑後殿が決めて下さるようである。」

コイエットは他界した皇帝(将軍)の母についての伝聞をこう書いている。

——彼女の出身は決して豪華な家庭ではなかった。しかし、皇帝(将軍)は彼女を可愛がり、彼女より1子を得た。そして、母子ともに皇帝(将軍)に召し出され、共に揃って生活した。その子が現在10歳の将軍である。

彼は以前に持っていた「万病に効く妙薬：犀の角」への興味も決して失ってはいなかった。犀の角の粉末について出島商館長日誌で論じてもいる。何

としても日本人が妙薬として崇めているものを、彼はどうしても信じ切れなかった。また、ある時には日本人たちと医学の議論に熱中したが、そのお膳立てには筑後殿が動いていたらしい。

1953年1月17日の出島商館日誌を開こう。

「筑後殿がわたしたちの内の誰かがドドナエウスの著作「本草学」をオランダ語からポルトガル語に訳してくれないかと頼んできた。⁽⁴⁰⁾ わたしは『ノー』と応える他はなかった。何としても、わたしたちが持っている僅かな語学力ではそのような大仕事は不可能であった。日本側の折角の好意なので、断るのが残念であった。」

日本人はポルトガル人を非常に憎み嫌っていたのだが、皮肉なことにポルトガル語は彼ら（日本人たち）の外交用語であった。そして、西洋人との貿易交渉⁽⁴¹⁾では、公式用語として利用されていた。それはジェスイット会宣教師が学校を建て、日本人に彼らの母国語のポルトガル語をきちんと教えたからである。しかし、当時、既にオランダ語を学んで使いこなせる日本人も実に少数ではあったが、居るには居た。その後、数十年するとポルトガル語は忘れられ、オランダ語が隆盛を極めるようになった。⁽⁴²⁾ 日本人（の蘭学者たち）は特にオランダ語の自然科学の書物を苦勞を積み重ねて日本語に翻訳し、刊行した。その中の主な分野は解剖学、天文学、数学などであった。そうこうして長崎にはオランダ語通訳（通辞）の特別なギルド⁽⁴³⁾が作られ、鎖国時代の外国交渉の窓口役として、事後続けられ、1853年にペリー提督がアメリカの黒船で浦賀に現われ、鎖国の夢が破られるまで続いた。

1653年1月31日、コイエットは医学知識を求められて応対しているが、西洋の医学からすれば、それは全く簡単な民間療法的な傷薬を塗り、絆創膏を貼る程度のものであった。

出島商館長日記には：

「わたしたち（商館）の医師が皇帝（將軍）が最も御蟲屑（ひいき）にしているシセンダヨウ（七太夫？）の肩から胸に掛けて大きなデキモノ（腫瘍？）ができていたので助け欲しいと言い、呼び出して行った。医師が検診して

みると、大したもの、切開手術しなければ生命が危ういと診断した。しかし、患者御本人は手術を受ける事に恐れをなし、大反対をした。そこで、医師は何ら治療もできず、患者は長期に渡る苦痛の中にもがきつつも、自分自身の体内の回復力に頼らねばならなくなった。午後8時頃、医師は絆創膏を持って再びシセンダヨウを訪ねた。彼は相当の高齢者であった。筑後殿がこれ聞き付けてやって来て言うには、手術をしなくてよかった。もし、医者が手を下した後に、患者が死ねば、全責任が医師に降り掛かるし、高齢な彼は手術はおろか、強烈な薬にも参ってしまうであろうからのことであった。」

1653年2月4日の日誌にも、また、コイエットの泊まっていた旅館に医者求めて来た。

「医者が江戸の市長(奉行?)のウメドノ(梅殿)に呼ばれた。彼は過去14年間も肩や背中、の痛み、に苦しめられていたが特に最近、は酷くなったそうである。また、彼の左足には全く力が入らなかった。その原因は小さな瘡(あざ)であった。彼は恥ずかしがり、それを自己流に処置しようとしたが、何ら快方には向かわなかった。いや、こじらせてしまっていた。商館の医師もあらゆる処方を試みたが、結局は無に帰したが医師は往診を感謝された。また、医師は度々、ウメドノを往診した。」

続く2月5日の日誌を見ると：

「毎年の慣例により旅館の勤め人たちが家の中から悪魔(鬼)の追い立てをやり、屋根の下、のどこにも(鬼は)居れなくなった。屋根のない家などに訪問してみても決して居心地のよいものではないので、この王国から悪魔(鬼)が全部出て行ってしまい、この春より、畑に作物の種を播き⁽⁴⁾果物や他の農作物を育てるが、決して雹(ひょう)、雷、嵐、また、その他(の天災など)により以後1年間は決して被害は蒙(こうむ)らないそうである。その行事の執り行いというのは、勤め人、たち全員が豆を手握れるだけ握り持ち、それを先ず、大声で怒鳴りつつ、天上に向けて高く投げつけるの

である。それから、家の中のあらゆる方角に向かって同様にするのである。これにより悪魔（鬼）は恐れおののき、農作物が実るまで決して戻って来ない。その後、戻って来ても、長い留守のため悪事を働く力を失っており、人に危害は加えないと日本人たちは信じている。」⁽⁴⁵⁾

さて、2月11日、筑後殿から連絡があり、翌日の朝8時に商館からの贈呈品を皇帝（将軍）に届けるとの通知があった。きっとフランソア・カロンが全権大使ブロークホビウスに対して「怠るなよ」と耳うるさく忠告したが、彼は直ぐに忘れたであろうことをコイエットは行なって翌日の備えとした。また、頭の良い築後殿もコイエットを非常に麗々しく、また外交的にもてなした。つまり、彼はコイエットを皇帝（将軍）訪問の前日に近所の大浴場に招いたのである。この日はまた別の角度から見ても、このスウェーデン人コイエットに取っては格別の日となった。その日に江戸には大地震があり、彼も少なからず驚いたであろう。しかし、生来の寡黙な彼は、その印象を何ら記すことなく、ただ「非常に大きな地震があった」とだけ書き残している。

2月11日の日誌を見てみよう。

「築後殿がわたしを浴場へ呼ばれた。それはわたしの宿屋から6、7軒先にあった。そこで、わたしたちは共に入浴した。その後、わたしは翌日の皇帝（将軍）拝謁のための万端の準備を終えた。非常に大きな地震があった。」

遂にコイエットに取っては桧舞台に立つ日⁽⁴⁶⁾がやって来た。入浴し、盛装した甲斐もあって江戸の城内へ迎えられたのである。彼の胸には心臓の鼓動がまるで凱旋門に入る戦勝将軍の勝利の軍歌のように響き渡っていた。彼の人生の出征航路を走る商船は万帆に順風を受けてわがままな将軍の側まで進み、拝謁を受けたのであった。しかし、コイエット自身それをいとも簡単に記しているに過ぎない。

2月12日の日誌には：

「贈呈品は事前に届けられていた。わたしはその直ぐ後に到着した。わた

したちが城内に到着すると築後殿が来られ、わたしたちに待機するように言われた。多くの貴族（多分、城内の武士たちであろう）や僧侶たちがわたしたちを眺めに来た。彼らはわたしたちの名前と年令を尋ねた。その内に彼らも消え失せ、再び築後殿が現われ、わたしたちを大きな部屋に連れて行った。その両側には多数の紳士（武士）たちが一列に並んで座っていた。わたしの知人たち⁽⁴⁷⁾は、そこで足止めされ待たされた。わたし一人だけが通辞と共に長老のアンドー殿（老中安藤右京の守亮殿）に導かれて更に奥の間に通された。その部屋の隣の部屋の境界線（敷居）に沿ってわたしたちからの贈呈品が床に並べられていた。その部屋の、わたしたちから20～25フィート離れたところに皇帝（将軍）⁽⁴⁸⁾が黒い服⁽⁴⁹⁾で立っていた。わたしは頭を深く、深く下げ、立ったままだったが、最敬礼をした。すると、アンドー殿が大声で、『オランダカピタン』⁽⁵⁰⁾と叫ばれた。まあ、このようにしてわたしは皇帝（将軍）の謁見をお受けしたのであった。わたしは直ちに後方に下がれという合図をアンドー殿から受けた。わたしは手前の部屋まで後退りした。⁽⁵¹⁾そこに筑後殿とヨシイエ（著者の読み違いらしく、長崎町奉行黒川与兵衛正直）が待っており、連れ立って宿屋まで帰って来た。」⁽⁵²⁾

2月15日、コイエットは皇帝（将軍）からの返礼品を受け取った。それは30枚のキモノであった。⁽⁵³⁾同時に長崎に帰っても良いという許可もおりた。そのためコイエットは早速、親切にしてくれた築後殿に別れの挨拶を告げて出発をした。

2月16日の日誌には、また骨の折れる話を書いている。

「築後殿が語ったのだが、皇帝（将軍）は今だにポルトガル人やスペイン人⁽⁵⁴⁾には嫌疑と怒りをもっておられるそうである。その理由は彼らの悪行⁽⁵⁵⁾により多くの日本人……それは数十万人の生命が奪われた上、更に、数万の日本人が海外に追放されたからである。また、わたしたち（西洋人）を出島に隔離し、皇帝（将軍）からも、県知事（奉行）からも厳重な管理をする理由もその事にあると言うのである。また、キリスト教布教を警戒して、

わたしたち（オランダ商館の）商館長も毎年交代させるのであるとの事である。もし、誰かが、今、日本で秘かにキリスト教の布教を始めたとしても、必ず1年以内に発見されるであろう。そして、ポルトガル人とスペイン人⁽⁵⁵⁾の言動にはくれぐれも注意するようにと筑後殿は警告した。もし、彼らが、また、他の国民が日本に対して何かの悪事を成さんと企てる動きを知るならば、直ちに報告して欲しいと言われた。」

そして、念願の江戸参府で皇帝（将軍）の謁見と貿易協定の確認を終えたコイエットは長崎の出島に向けて長い帰途の旅に出掛け、無事に帰着した。

季節は春となり桜の花が咲き乱れていた。コイエットは商館長室に戻り、昼間は精力的に仕事に励み、夕闇が迫ると机上でほほ笑んで日記を書いたのであろう。

6月24日の日誌を見てみよう。

「日本の暦で5月29日に、『川渡り』⁽⁵⁷⁾と日本人が呼んでいるお祭りがあった。水の妖精、又は流れの男⁽⁵⁸⁾が水泳中の者を水中に引張り込み、溺死させようとする。しかし、閻魔（えんま）大王と呼ばれる悪魔の王は助ける方法を知っている。そこで長崎の住民たちは竹竿の先に紙片の小旗を付けて水面を叩き、水の妖精に『悪事を働くなよ』と脅かして川辺を歩く、と同時に子供たちを助けてもらうために山伏に小銭を僅かだが、お布施するのである。」

翌日には彼は、会社の営利に関する台湾とそこへ出入りする中国人との間に持ち上がる問題について書いている。

6月25日の日誌には：

「数年間、北京で牢屋に入れられていた中国人イカン（一官）が牢獄を出て、息子のコキング（国姓爺）と一緒にすることに成功したという噂が流れていると南京から来た中国人⁽⁵⁹⁾が話した。これによると、近年必ずや中

国で大戦争が起こり、商取引が激減するであろう。」

徳川幕府は典型的な軍事独裁政権であり、スパイ、尾行、密告などが全国に横行していた。コイエットも日誌に、突然、長崎に出現した奇妙な男について書いている。

6月26日の日誌には：

「江戸から奇妙な山伏のような、また、托鉢僧のような男が長崎に来了。住民たちは彼は皇帝（将軍）から派遣されたスパイであり、政府の新しい政策がどのように取り行なわれているのかを調べて報告するのだと言っている。⁽⁶⁰⁾ このような人間は度々、衣装を変えて全国に派遣されている。また、素性を隠すために途上で助け人も変えているらしい。何を密告されるかも解らぬので、住民たちの皆が彼らを非常に恐れている。」

7月16日に、台湾の中国人たちが謀反を起こしたが、直ちにオランダ軍の傭兵により撃退されたことを、コイエットは手中の中国人から聞いた。

7月16日の日誌を見てみよう。

「リップ・シエンと名のる中国人が台湾にやって来て、バタヴィアから台湾に入港したジャンクを掠奪した。昨年（の）9月にも台湾のタンコーヤ（高雄か、譚口か？）において約3,000人の中国人が謀反を起こしたが、直ちに鎮圧された。当方（オランダ側）は3,4名の生命を失った。」⁽⁶¹⁾

また、キリスト教徒に対する苛酷な迫害が続いており、信者（切支丹）に対する態度は決して軟らいでおらず、些細な嫌疑でも生命を落とす危険があることと、キリスト教の印がないかどうかとメツケという秘密警察が今だに各家を廻って調べていると報じている。

7月20日の日誌には：

「ある若い婦人が2日前に脅かされ、⁽⁶²⁾ 突然、『おう、イエスよ！』⁽⁶³⁾ と叫んでしまった。彼女は訴えられ、県知事（奉行）は彼女を投獄した。それのみか彼女の養母は大富豪であったが、切支丹の嫌疑が掛けられた。そし

て、家宅が捜査され、非常に入念に探索された。そして、着物は全て千切られ、着物の中にキリスト教の本が縫い込まれていないか調べられたのである。（官憲は）このようなことをしてでも彼女がキリスト教とつながりがあることを証明しようとした。

小田原⁽⁶⁴⁾の大名の美濃様は父親の美濃の内匠の守殿⁽⁶⁵⁾と同様に、終始オランダ人に親切だったのだが、老中⁽⁶⁶⁾として江戸に召されていたが、久世大和さま⁽⁶⁷⁾と同様に、（将軍が他界されたので）皇帝（将軍）の後を追ひ、自ら進んでセップクをされてしまった。

昨年、将軍家光が死んだ。⁽⁶⁸⁾彼は切支丹の迫害を過激に行なった人物であった。彼は周囲の人物にも（切支丹のような）徹底した忠誠心を求めたため、この国の最高の地位にいた幕府の役人が2人、各々の家庭にある小さなお宮である神棚の前に座り、腹を切り自殺し、見知らぬ国へ旅立った御主人に従った。」⁽⁶⁹⁾

これに似た現象が多く日本史上に登場している。その中でも最も多く語られているのは、1912年、乃木大将とその御婦人の殉死である。また、明治天皇が御崩御され国葬された時も、弔問客の長い長い行列が東京の町中に続いた。古代からの伝統として、棺は5頭の牛が曳く木製の牛車に曳かれ、動く度に「キー」とか「ギー」とか響く「悲しみの7種の音」を出していた。その行列に日露戦争で旅順戦線の勝者、乃木将軍の姿はなかった。その翌朝、将軍御夫妻は白装束で割腹し殉死され、明治天皇の向かわれた最も長い旅に随行されたのであった。

さて、コイエットはタイオワン問題で苦悶していた。6月30日の日誌にはタイオワンで暴動が起きたことを記している。そして、その1週間後にタイワン総督フェルブルフ⁽⁷⁰⁾より手紙を受け取り、その内容を日誌に引用している。

8月7日の日誌を引用すると：

「ガン・カイ・ファイト（郭懷一）⁽⁷¹⁾を首領として3,000人程の中国人の農民たちが武装し、悪意を持って殺気立ち、蜂起したと彼（フェルブルフ）

は書き送っている。彼らは鎮圧され、今は平穏を取り戻した。昨年、タイワンから広東に向けて出発したわが会社の船舶は無事平穏であった。また、現在、パタヴィアから貿易船が2艘も到着したそうだ。タタール人が占領した他の地では考えられないが、われわれは自由に貿易活動ができる自由を享受している。」

このような記事を出島の(商館)日誌に記入した次元でコイエット自身、この戦いが彼の人生を大きく分ける決定的な意味があるとは毛頭と考えられなかった。当時の台湾総督フェルブルフはたった数百の傭兵の力だけで敵の攻撃を打ち返し、損害と秩序と平穏を建て直し、謀反を起こした反逆者たちには苛酷な刑罰を加えた。手持ちの武器で武装してやって来た中国人は戦術も作戦もなく戦いが始まると直ぐに敗北した。フェルブルフは山の斜面に陣地を構え、中国人の武装力と戦術が兵士として無価値であることを自分の傭兵に語り説き、遂に僅かのオランダ人傭兵だけで戦火に曝された危機のタイオワンを手中に納めて見せたのであった。しかし、その丁度8年後には同じようなことがコイエットの身の上に襲いかかり、彼が長年に亘って築き上げたオランダ東インド会社では最大級の地位と名誉を手離すことになるとは神のみぞ知る人間の運命の皮肉な巡り合わせであろうか。

日本語の諺に「地震、雷、火事、親父」があり、男性主権王国の日本で「恐るべきもの」の代表が羅列されている。⁽⁷²⁾ 日本の街の建物は実に御粗末であり、特に火災に弱いのである。しかし、時々襲う強烈な地震の振動を考慮してこのような家を建てねばならぬのである。時々だが、本当に地震、雷、火事が襲い、眼も当てられぬ悲惨な結果をもたらすこともある。ある時、通辞から「火の用心」の注意を厳しく言い渡されたようである。

8月12日の日誌にコイエットも書いている。

「わたしは火と灯火に特に注意するように言い渡された。わたしたちは屋根板に水を撒いた。同様に、垣根にも散水した。」

また、コイエットは日本の国に社会学的関心を持ったらしい。

9月3日の日誌を引用すると：

「7名の者が処刑された。その中には若い女性⁽⁷³⁾が1人居て、彼女は十字架に着けられて磔刑にされた。残りの者たちは銀の小判75枚を盗んだ罪の刑罰で、打ち首であった。この国では死刑執行人、即ち首切り職人は牛馬を殺す屠殺職人と同様に見なされ、一般の市民から隔離され、街の外に住んでいる。（遊女の）口入れ屋は彼らより更に恥ずかしい職業と見なされている。それは彼らが人の子を店に売り飛ばして糊口を得ているからである。口入れ屋の多くは貧しい家から歳の幼い少女を安く買い歩き、高く紅楼へ売り飛ばしている。売られた女は約束した奉公の期限が過ぎれば自由の身となる。ところで口入れ屋は薪を無料で十字架の根元に運んで来なければならなかった。十字架に磔（はりつけ）られた罪人を焼き殺すために使うからである。彼らも（奉行の）許可なしには、決して一般市民の家に近付いてはならなかった。」⁽⁷⁴⁾

コイエットはこの一繩ならぬ日本社会の大問題に大きな関心を寄せている。実際、当時の日本の社会は、どこでも威張り歩ける武士たちの上層階級もあれば、「エタ」と呼ばれた階級下の階層もあった。⁽⁷⁵⁾

彼らは街外れの特別な区域に住まされ特別な職業、例えば、夜警⁽⁷⁶⁾、墓穴堀り（隠坊）、首落とし（死刑執行人）、屠殺、皮なめしなどである。「エタ」は「人間扱い」されず、動物のように取り扱われている。⁽⁷⁷⁾もし、ある武士が一人の「エタ」を殺害しても、それは殺人罪に問われず、騒擾罪で僅かの罰金を払えば事が済むのである。⁽⁷⁸⁾

ある学者は「エタ」族の起源は遠く有史以前にアジア大陸から日本へ移住してきた一民族で「皮なめし」を職業とする一種族であったと信じている。それはスウェーデン（社会）に在住する「タツトレ」（タタール人）⁽⁷⁹⁾に相当するものである。だから、誰かが「もしかしたら、あいつはタツトレの出（身）ではなかろうか」と疑えば、その者はその時からタツトレの輩（やから）

とされてしまうのである。(現代)日本の「エタ」の多くはそれであって、わたしたち西洋人の眼には、普通の日本人と「エタ」の人との間には何ら違いはないのである。(これより数行を割愛)⁽⁹⁰⁾

コイエットは日本社会の観察を益々、続けている。

9月7日の日誌を見ると：

「出島の陸地側の海に日本人の僧侶の死体が浮いていた。彼はこの地では見知らぬ者であった。多分、川を渡ろうとして流れを横切っていた時に急流に流され溺れ死んだのであろう。その後、遺体は陸揚げされたがその側には誰も居ず、誰も役所に届け出しようとしないうちに驚いた。この国の習慣によると、遺体を発見した者が埋葬の責任を持ち、費用の負担もしなければならぬそうである。」

1653年、出島のオランダ人たちにとって緊張の解禁が例年よりも早く来た。9月11日に小型帆船「兎号」が長崎に無事到着したからである。その船にはコイエットの後継者に任命された男が乗って来ていた。彼の名はガブリエル・ハッパルトと言った。出島は急に忙しくなった。コイエットはサコクという外国への扉を閉めた体制下に例外的に存在するオランダ東インド会社の微妙な関係をこの新米の紳士にとことんまで教え込まなければならなかった。

しかし、その日の日誌にはコイエットは熱に冒された様に、異様な切支丹狩りのことを書いている。

9月20日の日誌を見てみよう。

「夫と妻だと思える2人の日本人が頭を下にして逆十字架に付けられて処刑された。彼らに一体どんなキリスト教(切支丹)の印(証拠)があったのであろうか、また、彼らがどんな悪事を成したと言うのだろうか。」⁽⁹¹⁾

それから2日後、日本の暦で8月1日である。長崎の住民は皆、何らかの贈り物を携えて2人の知事(奉行)を訪ねなければならなかった。9月22日

の日誌を引用しよう。

「本日、知事（奉行）に届けられた贈り物の価値は小判8,000両に相当する。知事（奉行）が入手したのは銀製品、絹織物、銅銭の束、毛皮でできた脚絆と靴、藁草履、等々で、全てが非常に貧しい住民から巻き上げた高価な品々である。贈り物が必要なのは住民の方だが、彼らは知事（奉行）を恐れるがために高価な品物を届けたのである。」⁽⁸²⁾

9月はこの周辺の海では「タイフー」の季節である。高速帆船「兎号」は幸運にも、長崎へは台風より一足先に、9月11日に到着した。しかし、大型帆船の方は悪天候に会い到着が遅れた。猜疑心の強い知事（奉行）のヨヘイ殿⁽⁸³⁾は貿易船がこのような遅れているのはオランダ側が何か良くない考えを持ち、何事かをまた企んでいるためだと決め付けている。通辞たちは彼を大変に恐れており、彼の断言に徹底だに反論ができず、「理由は悪天候による以外に何もない」とは言えないのである。

9月25日の日誌には：

「老練な通辞キチペー⁽⁸⁴⁾がハッパルト氏が同席していた時に、わたしに説明したことによると、知事（奉行）ヨヘイ殿に詰問された時の部屋の床が畳であったなら、知事の意見に反論しても構わないが、板張りの床の部屋に連れて行かれて尋問されたら、何を言われても、知事（奉行）の言うことを聞き下がるだけであるとのことであった。ああ、この国の対人関係とは、全くあきれたものである。ただ、奴隷のように黙々としている事が謙遜とされているとは。」⁽⁸⁵⁾

7月の末にコイエットにはある外交問題が浮上したが、判定の期限の延期を要請した。それと言うのは数隻のジャンク（小型船）が中国から長崎の港に入港したのだが、中国人が彼らの船に乗船していた日本人たちを伴って長崎の2人の知事（奉行）を訪問して訴えを起こした。それは、オランダ人の立場を悪くする告げ口とも思われた。彼らの訴えは、シャム川で⁽⁸⁶⁾オランダ船が中国船を襲い海賊的な行為をした。オランダ人たちは中国船に乗り移り、

積み荷であった多数の鹿皮を取り上げ、それを日本で売っていると報告した。知事(奉行)は中国人に、そのような行為をしたオランダ人のカピタン(船長)の名前を知っているかと尋ねたが、知らないと中国人は答えた。しかし、上唇に傷跡があったことを覚えていたと答えた。この話を聞いてコイエットはそれが船長クリスチャン・デ・フローフェのことであると思えた。そこで、コイエットはことの真偽を確かめるためには次のオランダ船が長崎に入港した時に新来のオランダ人に聞くより他に方法がないのでそれまで延期して欲しいと頼んだのであった。

9月28日の日誌を見てみると：

「通辞と役人が1人やって来て、シアムから来た中国人たちの訴えについて尋問した。先ず何よりも役人が知りたかった事は、オランダ東インド会社の者が、日本に向かう中国人のジャンク(小船)から鹿の皮などの高価な品物を本当に取り上げたのかという事であった。そして、それが本当ならば、どの品物をどれ程の数量を盗んだのか、また、その様な行動を取った理由を知りたいと言い、中国人の申し出た損害の表を手渡してくれた。

それに対してわたしの返事は次の様であった。：7月14日、3～4海マイルほどシアム河口から離れた海上にわが国(オランダ)の者が乗っている(スヒップ形大型船)「王冠の愛号」が3隻のジャンクを発見したので、検問し、一山の牛皮と鹿皮を没収した。それはシアムの王が8年前に当社と取り決めた契約に基づいて行なったのである。何故なら、彼の王国より当社が独占輸出権を持つ品目の1つが獣皮類であるからであった。また当社は蜜輸業者から没収した獣皮類の輸出販売の許可をも彼の国王より受領している。この事はシアムの中国人の貿易商人たちが全て承知の事であり、また、彼の地に赴く商人たちには毎年、到着時に公然と言い渡している。ここに言明した契約書簡の写しはシアム国皇太子の要請に基づき、6月2日にオランダ東インド会社シアム国商館長フォルテルス・ヴェステルヴォルトより中国人で、先に言明したジャンクの持ち主のテンコウ⁽⁸⁷⁾に手渡されている。それにも関わらず、彼は禁止されていた牛皮や鹿皮をジャンクに積み込み、もし、当社の者に発見されなければ、それらをここ日本へ運

んで来て売ったであろう。

通辞はこれらのことの全てを記録して知事（奉行）に報告した。夕方にその返事が届いた。知事（奉行）は報告書の検討を始めると書いてあった。やっとの事で銅の買い付けと倉庫に保管する許可が下りた。この中国人の問題が起こったのとわがオランダ船の到着の遅れにより許可が下りていなかった。」⁽⁸⁸⁾

また、コイエットは出島の倉庫から在庫品が大量に盗まれていることに苛立っている。10月7日の日誌を見ると：

「如何にしてこの湾の警戒を更に強めるように、お役人に盗難の苦情を訴えることができるであろうか。実は（出島出入りの）商人が盗むのではなく、職業的な盗賊が盗んでいるのである。何回も壁の穴を発見し、修理する側から次の穴が開いている。万能の眼であるアルゴスの眼⁽⁸⁹⁾を取り付けても盗賊を防ぐことはできまい。」

それから半月すると長崎の街は祭りで賑やかになった。日本人も祭りの大好きな国民であり、街中に色も鮮やかに光輝く御神輿（おみこし）を担ぎ出し暴れ廻って喜ぶのであった。

10月28日の日誌には：

「日本の暦で9月7日であり、大きな祭りの日であり、邪神邪教の偶像⁽⁹⁰⁾が栄誉を受けた。」⁽⁹¹⁾ 豪華に飾り立てられ、ありとあらゆる小屋や屋台が立ち並び、売り物や見せ物があり、猛練習を積んだ住民の踊りもあった。そして、お宮から御神輿を担ぎ出し、下町にある知事（奉行）の家……それは小さな藁葺きの小屋だが……まで巡って行った。」⁽⁹²⁾

更に続けて、10月30日の日誌にまで書いている。

「お祭りの2日目であった。遠出した偶像（御神輿）を取り戻し、再び町内を担ぎ廻ったあげくの果てに、お宮の中に納めた。」⁽⁹³⁾

翌日、コイエットは行商人が出島へオランダ人に売り付ける品物を運んでくるので、箱の中身の検査の立ち合いを知事（奉行）に頼んだ。そうすれば、オランダ船出航の時、再び箱を空け、中身を検査する手間が省け、出島を離れる忙しい時期に少しでも多くの時間が節約でき、他の仕事も更に多く片づけて行きたいと思った。

10月30日の日誌の続きの部分は：

「しかし、知事（奉行）はそのような話を聞く耳を持っていなかった。彼の答えは、出島にはわたしが自分の計画により自分で出掛けて行く。通辞やオトナたち⁽⁹⁰⁾にも山積みの仕事があり、急に急がせるわけにも行かない。ああ、世にもあわれな最低の出来損ない人間だ！また、何という恐ろしい人間だろうか。（聞くところによると）家人を過去2年間に7人も殺害したそうである。そして、その内に自分で自分の腹を切ることを企んでいると噂されている。⁽⁹⁵⁾このような（偏屈な）知事（奉行）にかつて出会ったことはなかった⁽⁹⁶⁾誰も危急に必要な用件を進言もできないし、直ぐに制裁の手が伸びるので、こちらに何ら過ちがなくても唯、平々として忍耐するのみである。今夜までに銅1,000箱が届いた。門を開け、倉庫に保管した。」⁽⁹⁷⁾

さて、この意地悪な知事（奉行）だが、早速、コイエットの車の走り回っている車輪に杖を突っ込んで来た。11月8日、コイエットは後任の商館長ハッパルト氏を伴って知事（奉行）を訪ね、日蘭貿易協定の僅かな改訂を提案した。

11月8日の日誌の記事によると：

「銅と樟腦の納品を早くして欲しいことと、優秀な職人の手による漆器をも買いたいと申し出たが、全ては旧来の協約に従い、慣例通りに行なうべしと知事（奉行）に言われただけであった。」⁽⁹⁸⁾

その理由というのも非常に日本的なものであった。何の事はない、この国の商売というのは組織化された泥棒市であった。大きな鮫は小物の雑魚の権利などを思いやる事もなく全商品を置いて置き、最後に全部を入手するのであった。

11月8日の日誌の続きも引用すると：

「金持ち（の商人）は全商品を割安に売り捌くことができるので続けて利潤を入手できるが、弱小の商人は競争ができなくなるので、利潤を得ることができなくなると言うのである。」⁽⁹⁹⁾

コイエットの眼に弱小商人が哀れに見えたのであろう。それはやはり彼の心の優しさの表れであった。彼とても、一番安く納める商人から商品を買ひ、それを一番高い値を払う別の商人に再び売り付けるのが商売のコツであることは知っていた。太陽が東から昇る限り、世の東西は違ってもこれぞ変わらぬ商いのコツと思われた。

1653年11月10日、奇妙な日本人たちが乗船して来て、オランダ船の錨を上げてくれたので、バタビア向けの航海が始まった。コイエットはこの日を待ち焦がれていた。「麗しのスザンナ」への想いが頭を離れた日は一日とてなかったし、まだ、腕に取り上げて抱いたことのない御曹司バルタザル・コイエットは一歳の誕生日を迎えていた。これでフレデリック・コイエットの第2回目の日本滞在は終了した。第1回に比べれば大事件らしきことは何も起こらなかった。そして、彼の胸の中には皇帝（將軍）の拝調の榮譽にあずかったという誇らしげな気持ちが湧いていた。それは彼が出る次の劇的な人生の序幕だったのかも知れない。⁽¹⁰⁰⁾

第5章：一官と彼の息子の国姓爺

この物語は一個の石から始まった。（現在の福建省）泉州の安海付近のチェキング（石井）⁽¹⁰¹⁾という町で、ある日、十代の子供たちが石を投げ合って遊んでいたが、運悪く一個の石が満州人の子供の頭に当たった。（当時）儒教国中国では社会階級制度が厳密に定められており、誰でも自分の所属する階級を知り、自分より上の社会階級に所属する者を重視していた。例え、子供でもその掟を破ることは許されず、破れば恐ろしい社会的制裁を受けた。その

(投石した) 子の名前はチェン・チー・ルング (鄭芝龍) と言い、貧しい零細漁民の子であった。⁽¹⁰²⁾

まず、他人の頭に投石した子供を復讐から守らねばならなかった。そこで彼は近くの自由都市ポルトガル領マカオにやって来た。そして、マカオにいた英国人宣教師が彼を匿い、食物を与え、世話をし、洗礼を授け、ニコラス・ガスバルデと命名した。⁽¹⁰³⁾ この少年はその後、スペイン領フィリピンで浮上してきた。彼は西洋人の下僕として働き、その後、オランダ商館の通訳になったというのである。⁽¹⁰⁴⁾

1620年頃、彼は日本へ行ったと述べている。多分、オランダ船の乗組員となったのであろう。日本人は彼を「一官」と呼んだ。それは、彼を欧名で呼ぶより、漢名で呼んだ方が、身近であるからである。

彼は平戸の近郊に住み、貿易関係に従事し、かなり成功したと考えられる。その後、地元の下級武士、田川の娘と結婚をしている。ところで、一官と彼の息子国姓爺ほど極東の国、日本で大衆に人気のあった男たちは、他には、そうたくさんは居なかった。もちろん、当時の混沌状態の中から、歴史的事実のみを正確に拾い上げることは不可能である。広範囲に散在する膨大な資料の中から、事実は事実として、また、虚構は虚構として、選び出し、主人公たちの人間性を、特に秀でた才能を取り出し、再構成して行くことは非常に骨の折れる仕事である。⁽¹⁰⁵⁾

一例だが、一官の日本人妻の多くが不明である理由は、実は彼女が社会的にも最下層の階級の出身で、外国人を世話し、身売りもする半遊女的な「メカケ」であったのではないかと疑う者もある。しかし、そのような予測を一切、跳ね退け、彼女は立派な武家の出身だと主張する者もいるのである。

中国人一官と田川氏の娘の結婚式が1624年7月に挙げられたことは、事実と考えられている。そして、長男 (国姓爺) が誕生している。彼の世界史の舞台への登場は、彼の退場と共に、非常に劇的であった。彼の母親は平戸郊外の海辺「千里が浜」に住んでおり、そこで、月早に突然、出産の準備を始めた。当時の習慣によると、偉大な武将の子とか、特別な事情で生命を与えられた子が母の胎内を出る時には墓石のように平らな石 (産石) の上で生ま

れ落ちるべきものとされていた。⁽¹⁰⁶⁾

冒険好きの一官は海賊貿易によく出掛けた。彼の長男が生まれた時も彼は
大仕事の最中であつた。数の中には横着な商人もいて、金銀財宝（積荷）を
満載したジャンクを丸ごと一官に任せ、中国の方へ運び、できるだけ値段よ
く売ることを頼んだ。この要領の良い中国商人一官はそのような旦那商人の
ジャンクも金銀財宝も売り捌く骨の折れる仕事を嫌がりもせず引き受け
た。一官はこのジャンクを台湾に廻し、積荷は売り払い、空船は集めて海賊
商船団を結成した。それを率いて中国沿岸に向かい、商品を積んで近づく商
船を襲った。翌年（1625年？）ある海賊の親分が死んだが、その跡目に一官が
襲名した。狡猾さのみならず、太腹の組織力、何にも怖じぬ経験を豊富に持
つ彼は瞬時にしてこの世界に頭角を現わし、自から（海賊商船）艦隊を持つ
に至った。これは台湾のみならず、南シナ海域全体に大きな影響を与えた。
「一官は一千帆（隻）」という語呂合わせが流行した。そして、1627年、突如
にアモイを襲撃し、領有するに至った。そして、南中国の揚子江から珠江の
間に住む、彼の餌食になる田舎領主たちを震い上がらせた。それを尻目に、
彼は影響力を次第に南中国へ浸透させて行つた。⁽¹⁰⁷⁾

当時の中国は群雄割拠の激動期であつた。1624年から1644年には各地に内
戦が発生し、その弱さを突いて異民族の侵入もあった。住民はその都度、掻
き集められ、右に左に動員され、戦争に駆り立てられ、親子兄弟は元より、
家族も、親戚もばらばらに散らされ、貧窮と絶望の中で生死の境を彷徨せざ
るを得なかった。その時、北方にモンゴル族が万里の長城を越え、満州タタ
ール族を打ち破り、北京に接近し、満州タタール族は明朝第17代目の大帝
（崇禎帝）を脅かした。追い詰められた大帝は（1644年に）首吊り自殺した。
1645年、南京城も満州異民族の攻撃に陥落し、明王朝の宗室は直ちに福王を
擁立して弘光帝を第18代明帝として南京で即位させたが、間もなく死亡し
た。

その後、明王朝の継承問題は一向に決着しなかった。その時、次第に勢力
を増してきた一官は福州でルン・ウー（唐王）を擁立し、皇太子を第19代明
朝皇帝（隆武帝）にした。以前には官廷の従者や通訳だったが、その後、海賊

に転じた一官は、良心のかけらもない非道な手段に走り、遂に大商船団を持つに至り、その蓄財は大きく、激動中の中国南部では当時、最大の経済力と政治力を持つに至った。一官は最初は中国人の清王朝に忠実であったが、それは彼が「王家に仕える忠実な僕」を道徳的に「潔よし」と志向したためではなく、実益を計算した結果であった。一官は中国南部を自分の手中に収めたかった。また、満州タタール族を絶対に中国南部には寄せ付けたくなかった。彼の顔は表向きの貿易商人の他に、時には野心家、冒険家、海賊などと多々、変わったが、取り引きが大きくなると会社を組織し、代表とか役員とか社長などの肩書きが必要になってきた。しかし、彼の考えだと、代表であれ、社長であれ、所詮は一匹の人間に過ぎず、人間そのものには大した価値を認めなかった。そこで、彼が目をつけたのが明王朝という血縁による身元保証であった。⁽¹⁰⁸⁾

一官には多数の女がいた。彼は海賊事業で力と富を入手すると、中国の貴族や名家の女を入手し、時代の経過により子供も多数できた。しかし、かつて、平戸の千里が浜の石台の上で劇的なお産をした日本人妻とその子供たちを決して忘れなかった。

1630年、一官は日本にやって来て、日本名が「福松」である長男に中国名「鄭成功」を付け、直ぐに連れて帰国した。一官自身は無学文盲の人間であったが、長男には学を修めた人間になってもらいたいと願い、息子、鄭成功は南京の大学に入れられた。彼は生来、賢明な少年で、頭脳は良く、次々と難解な試験に合格し、登龍門を異様な速さで登りつめ、学問と知恵の最高の試験にも合格し、満人の（高官の）礼服を授与された。

皇帝ルン・ウー（唐王）は「海防元帥一官」及び、博学の息子鄭成功に敬意を表した。海賊王一官は従来は貴族だけに授与された格式高い名誉職「海防元帥」を大切にした。また、満州族の官位を獲得した息子、鄭成功もルン・ウー（唐王）の謁見を受けたことを誇りとした。その時、明朝最後の皇帝ルン・ウー（唐王）は親愛の情を込めて、鄭成功の肩を叩き、自分には娘がいないので、残念ながら実の娘を娶らすわけにはいかぬが、実娘のように可愛がって育てた側女がいるので、その一人を連れて行けと言われたそうである。

しかし、この賢明な青年は妻は不要であるが、その代りに皇帝の家名を使うことを許して欲しいと願った。それ以降、彼は鄭成功の名を捨て、「国姓爺」即ち、国の姓名を担う者という意味の名となった。福建省やアモイの者にはコクセンヤと響くが、ポルトガル人やオランダ人の耳にはコシंगा、コシンニャ、コヒंगाなどと響いた。⁽¹⁰⁹⁾

一官と国姓爺の評判は東洋と西洋では大きく違っている。オランダ人は国姓爺を無謀な海賊、悪魔的なサディスト、狡猾な東洋の鬼の化身、全く信頼の置けぬ男と解している。しかし、中国や日本では国民大衆の義望の元で、多くの者が慕っていた。

日本では有名な劇作家、近松門左衛門が浄瑠璃で「国姓爺合戦」を書き上げたが、浄瑠璃（劇場）では数百年に渡り熱演が繰り返され、観客は盛況を極めている。平戸の町には国姓爺の死後150年経ち、彼の功績を讃えて記念碑が建立された。⁽¹¹⁰⁾

中国では国姓爺は父とともに清朝最後の後継ぎとして、勇気を持ち、首尾一貫して、息を引き取るその瞬間まで敵と戦った英雄として尊敬されている。

アモイの島のお寺に鄭家の父子（一官と国姓爺）の墓地があるが、1700年に北京の皇帝は勅令を出し、「国姓爺は反逆者ではなく、墓碑に書いてあるごとく（皇帝に）忠節な者であった」と言明した。つまり、彼、国姓爺は満州族の清王朝には敵であったが、前王朝を倒し、現（清）王朝に役立った「忠誠な者」と見なされた。

更に、その後かなり経ってから、1875年に清朝皇帝は「国姓爺は私心なき忠実な家臣であった」という勅令を出した。⁽¹¹¹⁾

しかし、注意して見ると父（鄭芝龍こと一官）と子（鄭成功こと国姓爺）には大きな違いがあった。一官は典型的な中国人で知識欲に富み、同時に懐疑的であった。そして、中国人にふさわしく、優秀な商人らしい名前を持っていた。一官にとっては人生の意味は力と金であった。それを得るためには彼はありとあらゆるものを使った。それ故、策略、暴力、背任、詐欺などは目的を到達するための手段であった。一官は、明王朝は危機を乗り越える可能性はある、少なくとも南中国では大丈夫であろうと考え、明皇帝ルン・ウー

(唐王)には忠誠を尽くしてきたが、しかし、清皇帝は中国人ではなかったの
で、万一のために、次の手筈は打っていた。

国姓爺の方は父親からの遺伝として、上手な人付き合いと明晰な頭脳を持
っていた。国姓爺には、同時に、日本人武士の娘であった母親の血の個性で
あろうが、日本の武士の面影が強く、彼が国主と思った人物に対してはあく
まで絶対的な忠誠心を持ち、小心者や姑息な者の小細工を軽蔑し、戦場では
猛然と勇敢な態度を取り、卓越した作戦と指導力を発揮したが、戦争集結後
には戦敗者に対しても騎士道的な寛容な態度を持った。

このような日本人と中国人の混血により当時最高の、また、最大の武将が
誕生した。国姓爺は戦闘の準備の手始めにその道の達人らしく敵へ、目立た
ぬように心理戦を仕掛けた。そして、情報スパイ網を張り巡らし、できるだ
け敵の敵の手により、敵を処分させた。敵地を攻める時にも、丹念に連絡を
取り、こちら側への内通者たちの「第5列」を使った。彼の用いた作戦や手
口は現在でも立派に使えるものであった。⁽¹²⁾

では、鼻から目に抜ける程の超インテリの彼が、情報は十分に入手してい
たにも関わらず、なぜ、敗けて没落して行く明王朝などを支援し続けたので
あろうか。

その原因は日本にあった。日本は世界のどの国よりも変わった国である。
このようなことが彼の人生に起きたことは最大の不幸であった。だが、彼は
そこで金銀財宝は何も失わなかった。その代わりに、彼は人間関係を失った
のである。それは、彼が最も大切なものとして最善を尽くして保持継続して
来た誠実心、忠実心、自己犠牲心、勇気などであった。

自分が仕える大名を失った武士は浪人となった。つまり、文字通り「舵も
コンパスも持たず、波に浮いて生きる人間」である。全てを失った者は、自
分の中の「良きもの」を忠実に捧げる相手がいないことである。日本で人生
の最悪事態とは「ローニン」になることであった。

このような名誉ある人間関係を日本人は「恩」と呼んでいる。日本人は両
親、教師など良き導きを与えた人物に対して「恩」を感じている。人は受け
た「恩」の1000分の1すらも返すことはできないと日本人は言っている。当

時の日本人が持っていたもう一つの名誉な不文律は「義理」であった。これはある人が誠意を尽くして達成せねばならぬ、または、充たさねばならぬ義務のことで、もし、果たすことができないとか、儀式の際に名前を出さぬとか、死を無視するとか、調子が上がって来ても有頂天にならぬとか、武士道にそった義務感でもあり、不可能なら生命を断って詫びることである。

日本人の血を持つ国姓爺が恩と義理の感覚から、自分の行き方を劇的に変更したことは人間的には不幸であった。かつて彼は儒教の寺院に行き礼服を焼き、自暴自棄となり、戦士になる以外に道がないことを神々に訴えた。国姓爺が満人服を軍服に着替えたのは1616年のことで、この若き儒教徒の人生に二重の不幸が降ってきた。

皇帝ルン・ウー（唐王）は楽天家であり、自分の力を過信し、自分の軍隊の戦力を過大評価していた。一官は皇帝に向かって、軍隊を海岸線に向かって建てられた城塞に集中配備するように提案し、配下のジャンク船団を装備し、満州族と距離を開けることを提案した。しかし、皇帝は自分が任命した海防大臣の名案には従わず、他の家臣に耳を貸し、こともあろうに臨戦体制の満州族軍に向かって進撃を開始したため、当然ながら大敗北を舐め、1646年8月、皇帝自身も自殺に向かった。

皇帝の自殺は誠実な皇帝派の国姓爺には大打撃であった。しかし、彼は更に驚くべき報に接した。父、一官が脱走中だというのである。かつての海賊王、一官も将来を楽天的に考えたらしく、力を失い埋没する皇帝ルン・ウー（唐王）を目にした時、彼は中国人らしく身を起こし、手綱を引き締め、満州族が乗っ取った北京城へ進軍した。必ず勝つと確信していた彼も刃が立たず、その後は一反逆者に過ぎなかった。彼は必死に満州族王朝を崩す作戦に出た。まず、敗北感の中に閉じこもった明朝兵士たちに諜報員に送り、援軍が来ると伝え、再起を促した。そして、自分の息子、国姓爺に軍隊を率いて助けに来ることを命じた。しかし、国姓爺は既に清朝皇帝唐王の死報に接していたので、援軍が無意味であるとして、その手には乗らなかった。

満州族王朝は一官の弱点を調べ上げた。多くの成り上がり者に共通して、彼も名誉ある虚飾的な地位に弱かった。満州族王朝はこの弱点を普段は知的

で現実主義者の一官に対して、効くか効かぬかは別問題として、巧妙に適用してみた。満州族王朝はこの男に「南中国副王」という、ある見方からすれば名誉高き役職を与えて期待させ、愚弄した。国姓爺はこの異民族の王朝のやり方に愚劣なものを感じ、抗議し、父、一官には恥の上塗りのような仕事には手を貸さぬようにと警告した。

満人たちは一官を慇懃丁寧にもてなし、将来を期待させたためか、彼は常時の注意を怠り始めた。彼の側には常時、重武装した500人の傭兵が護衛し、彼らなしでは決して移動しなかったのだが、満州族代表数名と商取引交渉のため、護衛兵を連れずに福建へ旅行した。すると、そこで満人たちは彼を捕え、巧く偽装して北京へ送り届けた。かつては数千の船を手中に収めた海軍元帥も、名誉職に眼が眩んだのか、満州族の金色の鳥籠に捕えられ、閉じ込められた一羽の老鳥と化した。それ以後、彼は牢に閉じ込められ、満州族の斬首台の露と消えるまで、決して釈放はされなかった。

国姓爺には次々と報告が届いた……清朝最後の皇帝の死、一官の援軍の要請、その後の満州族側への寝返り、一官の捕縛と処刑などと。父親の死は彼の心に重く響いたであろう。彼は日本人母親とは15才で別れたが、その後も常に母を子供の時と同様に強く慕っていたと言われている。ある中国の歴史家によると、彼は毎日、東の方に向い、はるか彼方に生きている母を偲び、涙を隠して、空を見上げたと書いている。1645年、彼は日本の将軍に母の渡航の許可をしつこく求めたため、遂にその許可が降り、彼女は中国の長男の元にやって来ることができた。⁽¹¹³⁾

1646年、多くの帆船を擁して満州族の南中国攻撃が安海の海岸線から始まった。住民の多くは難を逃れて敵軍の未だ来ていない他の地に移住したが、街に残った者たちもいた。その中に国姓爺の母もいた。そして、いくら抗戦してみても、優勢な満州軍に対して到底勝てる見込みはなくなって来た。すると、この日本のサムライの娘は城壁の淵に身を現わし、敵兵の眼の上方で少しも恐れず、堂々とハラキリをやったのけた。敵の眼前に恐れず姿を現わし、更に自害した度胸の良さに、「女であっても日本人はこんなに勇気があるのなら、男はどんなに勇敢なのか、驚くべきだ」と、これを目撃した満州軍

の兵士たちは互いに驚いて言った。

この事件の顛末には日本人としての国姓爺の個性が反映していた。清朝皇帝思宗烈の死去は彼に御恩返し義務を免除したのだし、忠実な後継者として遺産の相続にのみ汲々とすればよかったのだが、父の捕縛と侮辱死と母を自害に追い込んだ満州軍へ復讐を果たそうと義理の念に強く駆り立てられた。そして、国姓爺は俄然として満州族への復讐を誓った。先ず、手始めとして、僅か数百の清朝支持者を使って南中国を占領した満州軍にゲリラを送り込み心理作戦を仕掛けた。国姓爺は最初、父一官の所有していたジャンクを一ヶ所に集結した。そこで満州軍側は国姓爺が海軍力を結集して北京を攻め、入牢中の父親を救出するだろうと考えた。しかし、国姓爺は攻撃してこなかった。このような消極的な戦争ではどちら側にも何の利益もなかった。

満州軍の油断を突いて、突然、国姓爺は大規模な戦争を仕掛けた。大陸では彼の軍隊が勝ちそうな場面は数々あったが、結局には大勝を決めるほどの戦功はなかった。その理由として、彼が上陸させた軍の数が少なかった。大アジア大陸を野火のように荒々しく歴戦歴勝の満州軍にとっては、物の数ではなく、彼らは余りにも強くて大きかった。彼はアモイやケモイに海軍基地を持ち、南中国の海岸線や近海は手中に収めた筈だったが、戦ってみると戦果は上がらなかった。そこで国姓爺は日本へ4度も使者を送り援軍を頼んだ。日本は鎖国の真最中であつたが、幕府の中には彼に同情し、事を起こそうとする動きもあった。満州軍も全力を結集して戦ったが、戦果はなかった。そこで高官ハイ・チェンの名案で、父、一官が息子、国姓爺に親書を書き、親切な満州族に降伏した方が良いということを伝える宣撫工作に出た。⁽¹⁴⁾

この父親からの親書は国姓爺には大きな衝撃と落胆となった。国姓爺は軍隊を再整備して大掛りな水陸両軍による大反撃作戦に出た。国姓爺は満州軍との決戦と考え、1659年に彼はアモイ周辺の全軍に総攻撃の命令を掛けた。最初は国姓爺軍は各地で勝利を収め優勢と思われた。自ら清王朝の信奉者にして哲学者で、「国姓爺の生涯」の著者でもあるファン・ツン・シは次のように述べている。

「1659年5月、全軍が北に向けて進軍した。国姓爺の側近チャン・ファン・

エン(張官円?)の軍は揚子江を越え、クー・チョウ(九莊)まで進んだ。その翌日、国姓爺の軍も到着し、満州軍は大打撃を受けた。何千という満州軍や中国軍の兵隊が死んだ。国姓爺の軍隊は大勝利を収め、街を占領した。その後、国姓爺の軍は河を南に越えチェン・チャン(鎮昌?)の町を占領した。チャン將軍は揚子江の上流を掃討し、ウー・チャン(武昌)の街へ50里の距離に迫った。すると街を支配していた満州族の領主が現われ、チャン將軍に歓迎の挨拶を送った。同年6月28日、チャン將軍は南京の入り口クアン・ジン(関陣)に達した。国姓爺の軍は既にチェン・チャン(鎮江)を平定し、彼の海軍も集結し、7月1日、7人の斥候兵を送り込み、鎮府の街をも占領した。5日後にウ・フ(武府)[武漢]の町の占領文書ができあがった。この時、国姓爺はチャン將軍に向かって、ウ・フ(武府)はこの河の上流地へ通ずる大切な足場だと言った。そして、援軍が河南と河北から増強された。チャン將軍は命令通りウ・フを占領し、全州の町々村々を平定した。(揚子)江の南北両側の街々村々が彼の側に着いてきた。そして、南京攻略が話され始めた。……」

この作家の文を読むかぎり、国姓爺の勢力は全中国に伸びた感じもするが、歴史の胸は作家の筆以上に奇妙に動いた。作戦上の一寸した不手際と向こう見ずな勇敢さ、つまり少しの不注意が彼の手から勝利を逃してしまった。

国姓爺の下士官、カン・ファイ(漢周)は全軍を集結し、ある1点から1挙に街を攻め込み、征服すべきだと提案した。しかし、国姓爺はこの案を聞き入れず、街の包囲作戦に出た。しかし、全市を完全に包囲することはできず、手薄な箇所があちこちにできた。そこを利用して満州軍は街中へ援軍から食料までも運び込むことができた。もちろん、南京の街の状況は悲惨であったが、ベルギー人神父フランソア・ド・ルジェモンがその10年後に当時を次のように回想している。

「街は20間も敵に包囲されていた。毎日、多くの住民が飢えて死んだ。しかし、街では米も(闇でなら)少しは買えた。自殺者も毎日たくさん出た。ある日は飢えと自棄自暴で自ら手を縛って自殺した者の数が、200人以上と街の役所に記録された。満州族軍隊は少数で、街には中国人の住民が異様に多いので、軍隊が住民の反乱を恐れていた。不思議なことに、この大きな街

に満州族出身の兵士はたった500人であった。残りは彼らに雇われている漢民族の兵士たちであった。……」

国姓爺の誕生日が彼の不運の日となった。ド・ルジェモン神父は続けて書いている。

「国姓爺の誕生日が近附いて来た。中国の伝統では、そのような日は祝日となり祭日となる。たとえ戦争中でもそれなりに祭日として祝賀されるものである。もちろん国姓爺はそのような形式的な儀式には意味がないとして彼の誕生日の祝賀を廃止し、戦いに勝てば戦勝記念の祝賀を設けるとした。やはり反対者を恐れたためか、何かの迷信に迷ったのか理由は不明だが、誕生日は祝われず、その日の深夜に隊の兵士たちにお酒が配られた。兵士たちは深酒し、石のごとくに重く眠った。そこへ満州族軍の攻撃が始まった。部隊は戦争などできる状態ではなかった。満州族軍の斥候は刻々と国姓爺の軍の動きを観察していたのであった。満州族の軍は素早く集まり、静かに街を抜けて出て行った。……」

戦闘は国姓爺側の悲劇的な敗北で終わった。塹壕に兵隊は入っていなかったし、兵士たちは酒に酔い、深い眠りに沈んでいた。そして、進撃してきた満州族軍騎兵隊の餌食となった。国姓爺と共にアモイまで生き伸びた兵士が果たして何人いたのかどこにも記録が残っていない。国姓爺が徹底的に敗北したことだけは確かであった。

国姓爺の残存勢力は最早、満州族に取って、少なくとも中国大陸内では何ら危険な存在ではなくなった。しかし、彼の海上での勢力は、以前と同様に、何ら揺るがぬ不動な地位を保っていた。そこで満州族は約800隻のジャンクを整え、武装し、アモイの山頂に君臨する虎、国姓爺退治の準備を始めた。

国姓爺側の残存勢力として数えられるものは、ジャンクがやっと400隻であった。しかし、国姓爺には海戦の経験は豊富であり、数は少なくとも勝ち目はあった。それに対して、満州族軍は陸戦には長けていたが、海戦の経験は皆無であり、アモイ遠征が最初であった。

1660年6月17日の早暁、満州族軍の全艦隊は舳先をアモイ港外のチン・メン（潮門）湾を目指して進んでいた。国姓爺も（海）軍を急処、港外に出し、全

艦船を1列に長く伸ばし、包囲線を形成した。両軍が接近すると、双方目掛けた猛烈な砲撃戦が1日中、繰り返された。夕闇が迫る頃、国姓爺軍は（装備の薄い）敵側の護衛艦群の側面に火砲を集中攻撃した。そして、遂に、満州族軍の艦船の大半を火炎で包むことに成功した。その後、1週間も経たぬ間に海が荒れ、大風と大波が溺死した兵士たちや壊れたジャンクをアモイの海岸に漂着させたが、それを免れた満州族の艦船は1隻もなかった。

ここにこの海戦の様子を述べたあるヨーロッパ人の証言が残っている。国姓爺は宗教問題に関しても、かなり寛容な態度を持って接していたようである。というのは、北京へ赴いた有名な中国宣教師マテオ・リッチの従兄である、イタリア人のドミニカ派修道師ヴィトリオ・リッチはアモイの街に小さな教会の建設許可を申請している。彼は手記の中で、国姓爺が戦闘に勝利したことを感謝している。「彼（国姓爺）は誰にも屈しない勇気と巧みな海戦術を持っている。わたしは一宣教師として、明王朝信奉者の彼（国姓爺）の勝利を神に祈った。満州族の兵士が剣をかざしてアモイの街を焼き上げ、住民は市外に出ろと脅していたからである。」続けて、「この罪悪戦がその後、海上に移った……」と書いている。

国姓爺は4,000人の捕虜を捕らえたが、復讐する気持ちはなく、寛大に取り扱った。彼は潮門湾の戦いが終わった翌日、戦勝パレードを行なった。彼は捕虜を前にして大演説を叩いた。……満州族は不正の民である。彼らは漢民族の土地を侵略し、明王朝を崩壊させた。満州族は余（国姓爺）の父、一官を北京で捕え、牢屋に閉じ込めている。これらのことは全て以前の通りに回復せねばならぬ。各人はこのことを肝に命じて故国に帰れ。但し、お前たちに一つの義務を負わせる。それは、余（国姓爺）の不満を満州族王朝（清王朝）に伝えることだ。お前たちはこの事を以前の通りに戻す義務があるのだ。もし、お前たちがその義務を無視したり、忘れたりするならば、余（国姓爺）がお前たちの心に義務を思い起こさせる命令を下すであろう。……

その直後、国姓爺の兵士たちがこの捕虜たちを捉え、彼らの耳たぶと鼻先を刀で削ぎ落とした。その後、この哀れな姿となった捕虜たちは（故郷に帰ることもなく）福建の海岸地帯に落ち伸びた。

その後、国姓爺は南中国の不穏な情勢にかなり翻弄されたことが言い伝えられている。彼は部下を連れて海岸地帯に上陸し、殺戮を繰り返したり、海上に現われる全ての船を襲い、海上制覇権を手に入れた。

一方、満州族政権の方も「焼き払い政策」を推し進めていた。満州族皇帝（清王朝）は広東から南京に至る海岸地方の全住民の家屋を焼き払い、40中国里（約22, 3キロ）以上の内陸に移り住めという勅令を出した。この命令で影響を受けた人間の数は優に百万人を越えた。皇帝には住民の気持ちや懇願などを聞き入れる耳は附いていなかった。勅令は勅令であり、例外なく厳守実行された。そして、皇帝の勅令が生産した「死滅地帯」を巡視兵が日夜、巡回した。兵には、誰であろうと「立入り禁止地帯」に入ってくる者は、叩き切れという密令が下っていた。

ヴィトリオ・リッチは潮門湾での海戦の結果の報告を次のように書いて残している。

「（この付近の）町や村ではスペイン人の宣教師が長く働いていて、それなりの良い結果を出している。（ところが）今、人が来て、教会堂に火を点けた。すると多くの（キリスト）教徒たちが自殺に走った。彼らは長らく（何も）口に入れておらず、空腹と絶望の極限に至ったからである。この退去命令で害を被った民族は、決して漢民族だけではないが、漢民族だけでも生命を断った者の数は数十万から数百万に及ぶであろう。」

この南中国の「死の地帯」と化した海岸地帯から国姓爺は「大災難」以外の何を摘み取ったのであろうか。何としてでも彼（国姓爺）はアモイに集結している彼の艦隊のためには食料から、ありとあらゆる必需品を入手しなければならなかった。さもなければ、艦隊は分裂し、破滅するしかなかった。あの激しい海戦に勝った彼は前途洋々と考えられたが、彼は突然、自分が捕囚となり、足掻き藻掻いていることを知った。何としても、見えない敵に包囲されている城から脱出しなければならなかった。

時を同じくして、国姓爺には、もう一つ凶報が届いた。明王朝最後の世継である皇太子フ・エイ（薄永）が、国姓爺が満州族との戦いに敗北を帰したことを知り、忠誠を誓った護衛、僅か数名と共に、南京城を出て、ビルマ王の

領土に亡命したと言うのである。(フ・エイの息子にはコンスタンチンというクリスチャン・ネームがあった。) ビルマの領主はこの亡命者たちを満州族朝廷に引き渡し、外交上の利点を稼いだ。満州族王朝はユン・ナン(雲南)城府前の大広場で彼らを処刑した。明朝の再興を謀(はか)らんとしていた国姓爺の仕事はここで無意味となった。日本式に言えば、今や国姓爺は御主人をなくしたローニン(浪人)と化したのである。最早、「恩」を返すべき御主人も居なくなったし、「義理」を立てるべき御主人も居なくなった。明王朝の再興や復活は何がどう変わろうが絶対に起こらなくなったのである。

丁度、この精神状態の最中に、国姓爺の頭の中に一条の光明が届いた。そうだ、台湾(台湾)からオランダ人どもを追い出してやろうという考えが熟成した。この物資が豊かで、質素で貯え好きな人間が住む「宝の島台湾」を掌中に収めてみたいという昔から胸中に秘めていた考えに彼(国姓爺)は今や陶醉した。

これは父、一官が既に大昔に手掛けてみた美味しいお遊びでもあった。父(一官)が経営していた(海賊的)貿易会社の事業の中で、台湾(台湾)は最も収益の高かった場所の一つであり、もう少しのことで彼(一官)の手中に落ちそうにまでなった。しかし、その頃は彼(一官)は南中国に陣取り、他の方にも手を伸ばして、オランダ人植民地にまで手を入れて掻き混ぜることは毛程に考えていなかった。

しかし、一官は疑いもなく台湾(台湾)を攻略し征服することを企み備えていたことは確かであった。その後、中国大陆には内戦が起り、満州族の侵略があったので、多くの中国人が台湾に、難を逃れて移り住んでいた。その数は、その頃でも、25,000人以上と考えられた。その多くは農民であって、相当に広く広がる平地を耕し、農作物を巧みな技術と勤勉さを持って育てていた。中国移民の熱心な労働のお陰により、オランダ東インド会社は台湾(台湾)では植民地として年を追う毎に高い利潤を上げて来ていた。

そして、中国人移民の多くは一官や国姓爺の側に付く者であり、必要なら支援もしてくれそうであった。それ故に国姓爺はその企みに疑いは挟まなかった。それは事実でもあった。アモイ出身の中国人郭懷一が謀反を扇動した

ことがあった。彼はファイエットという名前でスメールドルブという村で漢名は、赤嵌（せきがい）で、ここにもオランダ人がゼーランディア城の出先城として建設したフォート・プロヴィンシア要塞城があるが彼はそこで航海士としてオランダ船に雇われていたが、幾千の中国系台湾人を掻き集めタイオワン長官ニコラス・フェルブルグに謀反を翻した。（本稿、前章、コイエットの日記、1653年7月16日の項、及び、脚注、参照）

それは1652年のことで、ファイエットこと郭懷一はある計略を立てた。先ず、タイオワン長官フェルブルグと彼の部下の将校たちを9月の満月の夜の観月会に招き、祝杯を挙げて大いに騒ぐこと。そのお祭り騒ぎの途中で、隣席のオランダ人全員を殺害すること。そして、その後、ゼーランディア城に向けて行進して進み、門衛を騙して開門させ、入城して、占領するという策略を立てていた。

この陰謀は思わぬ不用心から事前に露見してしまった。その経緯の発端はファイエット（郭懷一）の弟にあった。弟はゼーランディア城で傭兵をしていたが、その頃特に周囲の不穏な気配を感じていた。彼は何かが起るのではないかと（自から）調べてみて驚き、長官への報告を義務と感じ、長官を捜し廻り、教会堂の中で神への礼拝を捧げている長官をやっと見付けた。彼は兄たちの計略を報告し、直ちに礼拝を止めることを長官フェルブルグに言った。長官は直ちに1分隊の兵士をスメールドルブ城塞へ急行させた。しかし、兵士たちは道を途中で引き返して来た。それは兵士たちもこの反乱の事実と経過を調査したところ、現状を把握し、作戦上、反乱軍をゼーランディア城で迎え撃つのが最良の方法と考えたからであった。

その後、長官フェルブルグは知ったのだが、ファイエットと彼の反乱者の仲間たちは台湾各地の町や村の数ヶ所に火を点けて焼き尽くした上で、約120人の男を掻き集め、反乱軍に仕立て上げ、船に乗せて運び、待たせておき、その後、オランダ人たちを、仕掛た罠に落とし入れ、その後、彼らに逮捕させようとした。そうすれば彼らに反乱軍としての特別な訓練がなくても、大仕事ができる筈であった。

ところで、この時、運は全くオランダ側に向いてしまった。反乱軍が乗っ

た船が近着いて来たので、待ち構えていた兵士たちが銃を撃ったところ、最初の一撃で先頭に立っていたファイエットが死んでしまった。自画自賛の計略を振り回して掻き集めの小心者たちを叱咤激励していた親分を最初に失った反乱軍は何をどうすべきなのか、文字通り、路頭に迷った。そして、反乱者の方から戦列が崩れ、作戦も指揮も何ら役立たず、皆が我先にその場を逃れようとし、大混乱に落ち込み、瞬時に鷄合の衆と化した。戦闘の意志など微塵となって飛んで行った。

長官フェルブルグは両手の拳を強く握り締めて立ち上がった。この反乱劇で中国人が数千人も死んだと思われたからだ。ファイエットの副官だった男は、辛うじて山地に逃れていたのだが、遂に検索され、追い詰められ、オランダ側に捕らえられた。そして、ゼーランディア城に連れて来られ、長官邸前の広場に連行され、弱火でとろとろと焙られ、長時間かけて焼き殺された。更におまけに、炭のように黒くなった死骸は縄に付けられ、馬に引かれて泥道に糸をつけて巡り廻された。そして、反乱軍の捕虜の全員、首に縄が張られ、その先はゼーランディア城の正門の両側の太柱に張られた太縄に縛られむごたらしく処刑された。

瞬時にして街は平静を取り戻した。しかし、ものの常として、表面は静か平穏であっても、その水面の遥か下には大きなうねりの底流が走った。台湾在住の中国人たちは、この誠に些細な反乱でも（事実、オランダ側には何ら損失はなかったと思われたが）意外に酷な仕打ちを受けたので、以後、もしオランダ人と事を構えるには、台湾以外の「外からの大きな力」の援助がなければ、決して何もできないことを大教訓として、多くの同胞の生命に替えて、学び取った。そこで、その対岸のアモイに居る国姓爺の方へ自ずと彼ら（中国人系台湾人たち）の眼が向いていた。

そのような理由か、この明王朝信奉者、国姓爺も最初は順風を受けていた。しかし、中国沿岸貿易から撤退を余儀なくされた時、彼は台湾侵略を決意し、その台湾に、いついかなる時にも絶対安定した生命の糧の倉（永代倉）を建て上げたいと願望した。台湾にはたくさんの中国系住民が移住しており、オランダ人支配を嫌悪していた。それ故、国姓爺は活動的な「第5列」⁽¹¹²⁾を巧み

に利用することを考えていた。そこで、父一官が敷いた昔の取り引き仲間の中国人たちを探り出し、使える者は息を吹き込み再利用することを先ず考えた。それから支配者のオランダ人の台湾長官の側近にまで情報提供者（スパイ）の網を張り、アモイに居ながらにして情報を集め、策を練り、手をこまねいて待つとした。間もなく国姓爺はオランダ軍の台湾防御体制を徹に入り細に入るまで調査した。そこで、彼はゼーランディア城の模型を木で作らせ作戦行動や臨戦体制を彼の武將や組頭となる部下たちに教えた。また、彼は詳細を記入した台湾近海の海図も島の（陸）地図も入手し、壁に張り、ジャンクの接接地やその背景地の様子までも詳しく教え込んだ。

国姓爺は「トロイの馬」を敵の目前に置くような劇的で馬鹿げた作戦は好まなかった。それに替えて、彼は心理的作戦を敵に仕向けることとした。オランダ人たちは国姓爺の居所がいつも把握できず、判らなかった。アモイからの情報提供者たちが、国姓爺が台湾攻撃を直ぐ実行すると言っている最中でも、彼は友好的な態度で、笑味を浮かべ、懇懇丁寧にオランダ人たちに接した。しかし、国姓爺が反対者に対して、血生臭い執念を持って仕打ちをする反面、彼に従う従順な賛同者たちを柔軟寛大に取り扱う人間であることを人々は噂していた。

中国系台湾人の村々ではその内に変な事が起こると不吉の前兆が噂され始めた。それは自然の成り行きとして、オランダ人の台湾支配はもう直ぐ終わりを告げるであろうというのである。国姓爺は台湾中に疑惑の種を播くことに成功したが、それだけでは満足しなかった。彼はその親元のオランダ東アジア支配の牙城、バタヴィア城のある周辺に住む中国系住民にもそのような噂の種を播き、猜疑の種火の発煙を成功させた。オランダ人の側から見ればこれらは誰か（国姓爺など）が火種をまいた単なる噂話であり、……特に中国人の間には時々、そのような虚言の嵐が吹き荒れるので、彼らが何に踊ろうがうなされようが、それほど真面目に取り上げる必要はないという考えが支配的であった。しかし、誰が何を言おうが、この噂を非常に気にしていた男が二人居た。台湾長官のニコラス・フェルブルグであった。彼自身は既に早々と任務交替でバタヴィアへ移っていた。彼はたった120人の傭兵だけで

台湾で起きた中国系住民のオランダ人への暴動を鎮圧し、数日の内に数千人の中国人暴徒(?)を殺害した経験が既にあったが、彼フェルブルグによると、中国人は非常に同族意識が強く、扇動者に扇動され易い国民で、集団行動は取るが、個人個人としてはあまり強い兵士ではないと断定していた。すると、国姓爺の兵が、ファイエット(郭懷一)の兵よりもずっと質が良いとか強いという理論も普通には成立しない筈である。

何はともあれ、国姓爺は歴史的に最良の組織力と最強の水陸両用軍を整備したと自信だけは持っていた。そこで口論好きで横着なオランダ人の眼を醒ましたことだけは確かであった。フレデリック・コイエットは1656年から(フェルブルグの後任として)台湾長官となった。そこで、1661年4月30日、早暁、非常に良く装備され、武装され、知的に訓練された決死の敵軍の恐るべき攻撃に曝された。⁽¹⁵⁾

(次号へつゞく) ☆☆☆

注

- (1) 当時のバタヴィア総督は以前に平戸のオランダ商館長の経験があり、会社切つての日本通のベルギー人のフランソア・カロンであつて、コイエットの義弟に当たる。
- (2) この事件とは：前号の拙訳コイエットの人生（1）p.48参照：オランダ船員が南部藩領内に突然上陸し、取り調べの末、オランダ人であることが判明したので釈放された「南部事件」のことであるが、外国人入国禁止を掲げている鎖国中の日本国に無断上陸したオランダ人10名の生命を無罪放免したが、感謝状も感謝贈答品も送らぬオランダ政府、および、直接の関係者であるオランダ東インド会社に怒りと忿懣を述べ、お礼の催促を幕府がしたことである。この事情を村上訳「長崎オランダ商館日記」第1巻、242ページから引用してみよう。以降〈村上、1：242〉と省略、：商館長ヤン・ファン・エルセラック1643年9月10日の日誌より：「日没2時間前、奉行は乙名四郎右衛門、及び通詞らを商館に遣わして次の事を伝えた。今、江戸からの書簡でプレスケン（号）というオランダ船が1隻、日本の極端である奥州、即ち（伊達）政宗の国の南部市の前に投錨した。同所の人たちは欧州人を知らぬため、イスパニア人かポルトガル人、または彼らと同じくキリシタンであろうと思い、全員を上陸させ、捕らえて江戸へ送ろうとしたが、船長、及び商務員と交渉した上、彼らの他に8名が抑留され、船と他の乗組員は釈放される事になった。前記10名は100マイル離れた江戸に送られたが、船長ヘンドリック・コルネリスゾーン・スハーブ（32歳）、商務員補ヴィルヘルム・バイレフェルト（24歳）、その僕パウルス（14歳）で、その他の名を彼らは未だ知らない。……奉行は彼らがオランダ人でキリシタンでないことが確実となったので喜び、短い書簡を書く事を許し……好い待遇を与えた。船はその間に出帆したが、どこへ行ったか不明である。オランダ人の中にはポルトガル語、またはイスパニア語を話す者が1人もなく、（原註に、「この記事は誤りなり、船長バイフェルトはイスパニア語が堪能なり」とある。）……前に会社の通詞（元平戸商館通詞）藤左衛門が江戸行きが命じられた。我が船の出発前に前記オランダ人が長崎に来て、同船で帰国できることを希望する……」
- (3) 商館長としては高額である。ラテン学校とは日本の旧制の高校に相当し、有名大学入学の準備の英才教育専門学校に相当。
- (4) 著者ムレーンは彼を新任大使兼商館長として本書で取り扱っているが、筆者が再

調査してみると、彼は上席商務官として出島勤務しているが、大使や商館長には成っていない。その当時の状況を見てみよう。1649年8月7日に「マースランド号」にて新任の商館長アントニー・ファン・ブロウクホルストが長崎の出島に到着している。同年9月19日ヤハト船（英語のヨットに相当）「ロバイン号」にて、南部事件決着のための特派大使ブロックホビウス（途上で死亡し）が到着した。その首席随行員がフリシウスであり、彼はブロックホビウスに替わって大任を善く担ったのだが、そのため皇帝（将軍）拝謁にも出席したが、商館長ではなかった。しかし、コイエットの後任の商館長はジルク・スヌーク（デリリック・ストローク）であった。

- (5) オランダ人たちは江戸幕府の将軍を機能的にも皇帝と呼んでいた。
- (6) 贈り物を渡すやり方もいろいろあって、日本人が好むように「つまらぬ物ですがどうぞ」という具合に差し出すことで、「海老をやるから鯛を出せ」の意味ではないとのこと
- (7) 商館日記に彼の名前はオランダ式に *Juriaan Schaedel* と記入されており、日本側でもユリアン・スヘーデル、ジュリアン・シャーデルとも書かれている。
- (8) 原語ではシッキンゴドンネだが、大目付井上筑後の守政重であろう。以後、全てこれに準ず。
- (9) 拙訳「ヴィルマンの日記」によると、7月26日、ロバイン（ルビン）号にて日本へ出発したと書いている。ヴィルマンは祖国スウェーデンに帰国後に旅行記を書いたもので、彼の記憶違いかも知れぬ。既にブロックホビウスが死亡し、フリシウスが業務代行したことまで同日の日記に書いている。
- (10) 徳川家3代将軍で在位年間は1624（寛永1）-1651（慶安4）即ち、その直後、死去している。
- (11) 村上直次郎訳「長崎オランダ商館の日記」1巻、p. 254（以下〈村上、1：254〉と略記）によるとブロックホビウスは8月15日に死亡、享年は老齢とは言え50歳以下であった。長崎への旅は使節船ロバイン号で長崎入港は9月19日午前10時頃であった。（商館長ジルク・スヌークの日誌による。）

著者は突然12月31日、江戸参府に移っている。それまでの経緯を略記すると、スヌークは11月5日にウィッテ・バードル号にて長崎を離任し、後任の商館長にはアントニオ・ファン・ブロウクホルストになった。彼は商務官として在日経験も長く前任のコイエットとも仕事をしている日本通であった。11月25日、江戸参府に船で出発した。随行のオランダ人24名とは驚くほど多勢である。前回コイエットの時の随行オランダ人は6名であった。旅順は築島から乗船したが逆風で帰還

し、風待ちで27日に再出発、逆風で約1時間動き小江で停泊。29日、平戸着。30日田助に停泊。12月1日、田助に停泊。2日、呼子に停泊。3日、下関、2日間停泊。5日、コルネヤマ？停泊。6日、向湾に停泊。7日、室に停泊。逆風。11日兵庫（その間、どこかに停泊したはずだが、記録がない。）他の3隻の船に乗り換え、12日、脇の浜に停泊。13日、大阪に上陸。小屋を建てて宿泊。20日朝、大阪から陸路出発。馬128頭、オランダ人24人、日本人310人、枚方で昼飯。夜 京都、初めて日本の旅館（宿場）に宿泊。21日、草津泊。22日、水口で昼飯。関の地藏泊。23日、石薬師で昼飯。桑名で夕食、その後、船で宮（名古屋）に渡る。24日、岡崎で昼食、赤坂に泊。25日、浜松で泊。26日、袋井で昼食、金谷に泊。27日大井川渡り、岡部で昼飯、江尻に泊。28日、吉原で昼飯、富士川を渡り、三島に泊。29日、箱根を越え、小田原に泊。30日、大磯で昼飯、神奈川に泊。31日午後3時に江戸に到着である。

- (12) 士農工商という徳川時代の日本のカースト制度は著者を始め当時の欧州人の日本の社会構造の一般的な観察。
- (13) ヴィルマン自身もこのような評価を受け、また、同様な理由付けをしている。
- (14) 〈村上、3：34〉ピーテル・ステルテミウスの日記；1650，11，14より：「商務員ウィルヘルム・バイレフェルトほか3人のオランダ人が江戸から帰着。砲手たちの業績と殊に臼砲の発射が希望通り大成功に終わったので、陛下（将軍）は大いに満足され、オランダ人は非常に尊敬されるようになった。それで大目付筑後殿は陛下（将軍）の名により砲術師たちが我らの到着まで滞在して戦術に関し教授することを命ぜられた。その後、数日たってバイフェルトらは突然、大目付から出発の許可を伝えられ、3日の後、筑後殿に告別の際、陛下（将軍）の命によって1同に上衣20とスホイト銀150枚を分かち賜った。即ち、ウィリアム・バイレフェルト：上衣20，砲手ユリアン・スヘーデル：スホイト銀100枚，医師カスベル・スハームベルヘル：スホイト銀30枚，伍長ヤン・スミット：スホイト銀20枚。

〈通航一覽：巻の250（長崎実録大成よりの引用）〉：

慶安三康熙年，去る寛永二十年南部より送来阿蘭陀人之内カウクマン，ビルベル火矢打エリヤン，外科カスフル，ヤンズノッケルテ五人正保元年より江戸表に滞留せしめられしが，此度札押之甲必丹并使者長崎に連帰る。右火矢打外科等当方之者稽古之為被令在留しなり。

〈寛明日記，〈慶明録より引用〉〉：

慶安三年七月阿蘭陀人於牟礼野，来月初之頃，石火矢并鑓之石火矢為打可申旨被仰付，牧野佐渡守を檢使に被仰付。

- (15) 1フロリンの現在値が計算できないのが残念。
- (16) 当時のオランダ語の発音ではカスパー・シャムベゲンの表記の方が近いが、混乱を防ぐために先人の残した伝統的表記にする。
- (17) 国内留学は、日本国内で外人から西欧の知識を学ぶことで、今日では珍しくはないが、南蛮人が抹殺された当時では非常に珍しく、これが蘭学の先駆けであろう。
- (18) 博物学とは広義ではありとあらゆる物事への学問の意味だが、狭義では自然科学、特に現在の動物学、植物学、鉱物学、天文学などであった。
- (19) テュンベリイがスウェーデン語式の発音だが、慣用に従う。
- (20) 実際にはケンベル、ツンベルグ、シーボルトの三学者の小さな合同記念碑だが1945年の原爆で破壊された。
- (21) 日付けは前後するが。
- (22) ヴィルマンの職務は付き添い当番兵のようで原語のスキエルサントもセルゲアント(軍曹)と注釈されている。

ステルテミウスが商館長を止めたのは(村上, 3:87)によると、1651年11月1日で、彼の商館日誌はその日まで書かれている。また、同日始まるブルフの商館日誌によると、彼が長崎を去ったのも、同日で、バタヴィア行きのフロイト船「ポーランドの王号」で帰国した。(村上, 3:89) アドリアン・ファン・デル・ブルフは長崎出島の第12期オランダ商館長となった。

- (23) この語もいい加減で「ホープメスタレ」の意味は「コック長」だが、それは給料を支払う名目的待遇であり、実際には彼の個人的な用務員であったのでろう。
- (24) 彼が勉強したのは航海術のようである。
- (25) ヴィルマン紀行記によると1652年2月11日の午後、大総理大臣様(大目付役筑後の守正重)に呼び出され、地球儀と地図の解説をしている。また、2月14日には大砲などの操典術を教えている。
- (26) 前記同様、大目付筑後の守正重。
- (27) ヴィルマンによると、それは2月5日のことで、9発の砲弾を発射している。

しかし、2月5日のアンドリアン・ファン・デル・ブルフの書いた長崎商館日誌に更に詳しい。(村上, 3:107): 正午頃、筑紫殿が自邸で前期ステッキ(長筒銃)の試射を見せるため商務員ボウヘリヨンと銃身を調整した予の僕(しもべ)の来邸を求められたので派遣したが、彼らは7時半頃帰って、閣下は朝鮮と対馬の領主の来訪を受けて大宴会を催し、多数貴族列席で庭内に設けた場所で試射を行なわせ大成功され大いに喜ばれ、右の僕(しもべ)は日本の誰かにこの話をしたか、また誰かにそれを教えたか、弾丸はまだ残っているかと問われ、否と答えた

ところ、誰にも教えぬようにと勧められた後、彼らを宴させ、告別の際謁見式は顧問官も彼も知らない特別の支障が起こらねば、28日に行なわれるであろうと言われた由。通辞はまた筑後殿が進物明細書を見て、皆適當であるが、ただ伊丹シェーサ（伊丹廉勝、雅号が順斎のためジュンサイと呼ばれたのであろう）様への進物は前に返還されたこともあり今は剃髪され、他にも理由があるゆえ見合わせるよう、また謁見に支障が起きた時は献上品は官城の付近にある耐火倉庫の1つに納めるよう、勧められた由話した。

- (28) ヴィルマンによるとそれは2月14日の夜、商館使節の送別会での席でのこととしている。同じ箇所を商館日誌には、〈村上3：114〉：筑後殿が通辞と予の従僕（ヴィルマンのことらしい）を自邸に招かれ花火（火炮のこと）その他の軍事上のことについて尋ねられ、回答に満足され、自分の側に招き、酒と肴で宴され、予自身でも望まれぬ程の待遇を受けた由で、夕刻近く閣下の通辞と一緒に帰って来た。
- (29) 何という題目の本をいつどこで出版したのか筆者には不明である。また、著者ムレーンはどこでその資料を入手したのかも不明である。1600年代に日本へ旅したスウェーデン人は本書の主人公のコイエット（1620-1689）（日本滞在は1647-48, 1652-53）、ヴィルマン（日本滞在は1650-51）、Nils Matsson Köping ニールス・マツソン・シェーピング（日本訪問は1650らしい?）、アンデッシュ・トーレソン（アジア滞在は1674-83、いつ日本を訪ねたかは不明）の4名が現在判明しているのみである。1700年代になると交通の便も改善され、かなりのスウェーデン人が日本を訪ねている。ちなみに有名な植物学者リンネの弟子のツンベルクの日本滞在は1775-76である。その後、明治まで比較的多くのスウェーデン人がオランダ人に交じって訪日しているのが驚きである。

管見で失礼だが著者ムレーンはここでスハーデル（スウェーデン名ヨーハン・シェードレル）とノルテリエ市（ストックホルムの北東にあり、それは現在でもフィンランド行きの船の出入りする大きな港町）出身のヨーハン・オーロフゾン・ベリイとの混同ではないかと思う。彼が本当は1番最初に日本を訪れたスウェーデン人である。コイエットが最初に日本の地を踏んだのは1647年11月4日であるが、彼ベリイが長崎に来たのは、それより約3ヶ月以前の1647年8月8日である。当日、長崎に入港したオランダ船は2隻で「ベルクハウト号」と「カンベン号」だが、彼は「カンベン号」に乗っていたようである。彼は1651年にオランダ東インド会社を辞めて帰国し、スウェーデン海軍に士官として入隊し、数々の戦功を樹て、1676年、海軍元帥に国王より任官されベルゲンシェーナ（山の星）という貴族の家名と家紋を授与された。それ故、本書の主人公のコイエットは、現

在, 考証される限り, 日本に来た最初のスウェーデン人ではない。

- (30) スウェーデンでは春の到来を祝う5月1日の前夜祭日 Valborgsmässafton ヴァールボリス・メッサ・アフトン (春の美女ヴァールボリス祭前夜祭) で国中で焚火を炊いて祝う国民的な祭りで, 暗くて長くて寒い冬が去り, 太陽が輝く暖い生命力のみなぎる明るい春の始まりを祝う。(現在でも) 野外で大騒ぎする大祭日である。
- (31) 現在では中国東北地区と言うべきであるが, 当時の一般的な呼称を取って踏襲。また, タタールも蒙古系民族のことだが, スウェーデン語では英語と同様に「獠猛な民族」という意味にも使われるし, また, タタール人を意味する「タッタレ」は社会の最階層以下に所属する「流浪の民」の卑称に現在でも使われている。
- (32) これは中国の諺の意識で, 「学問を捨て, 現実の世界に生きる」ことの象徴であろう。この項は村上「バ3」1653年2月1日に記載。
- (33) 実は本書の著者も台湾 (現在の台湾本島全体の呼称) とオランダ植民地のタヨワン (台湾島南端の安平アンピンの先端にある地峡でつながる小島の上に築かれたゼーランディア城とその側の海港で武装はされていたが貿易基地) と混同している。
 当時, オランダは台湾ではキールン, 淡水, シンカン, マートウをはじめ数ヶ所に駐在員を派遣し, 商品の買い付けをしていた。また, 中国系現地人や原住民への宣撫工作の一環として各地に点在したキリスト教宣教師を経済的に援助していた。特にゼーランディア付近のサカムは重要地点であった。
- (34) 特に1653年5月9日の商館日誌は, タヨワンのオランダ商館書記スヘーデルの報告でタタール族に贈り物を捧げ貿易許可を得るために広東に向かい, 前国王ビグナボン, 新国王ジグナボンとの会見の様子, 北京の現状, マカオ勢力のオランダ妨害, マカオ攻略の必要性など実に細々に報告している。その和訳 (村上訳) は12ページにも及ぶ。
- (35) 原書の脚注にハラキリの解説がある。「ハラキリとは字義的には腹を切ることである。これは国の法律で定められているものではなく, 広く民間的に行き渡っている刑法で, 正しくはセツプクと呼ばれている」と。全く素気ない簡単な解説だが, これが著者また現代スウェーデン人の一般的な切腹観であろう。
- (36) 石材を買い付け, 船で運び出そうとすること。
- (37) なぜオランダ人が石を買うのか, その石をどこで何に使うのか, 日本に来ているオランダ人がバタヴィアでの教会建築用の石材を長崎から運搬していることはキリスト教を禁教としている日本の皇帝 (徳川幕府) に取っては大事である。(村上:

3:192) コイエット 1652, 11, 20 の商館日誌：「孫兵衛が来てパタヴィアからの注文の石材は船に積み込むことも困難であり、そのうち教会用のものは彼の地で中国人が加工するため、もし、そのことが知れて奉行その他の人たちから我らが疑われることになっては大変であるゆえ、その輸出は取り止めるが宜しかろうと言った。これは2度目であるが、これよりも大切なことについても我らは通辞らの意見に従って処置せねばならぬのである。」

11月29日の商館日誌の村上訳：当所の中国人たちの間には彼の国でフォルモサの我らの会社に不利益な計算をしているという噂が立っている。

(38) 大目付、筑後守正重であろう。

(39) 原著には「前月の最初の日」とある。

(40) この本については不明。当時の通訳（通辞）はポルトガル語しかできず、随分といい加減ででっち上げが多かったらしい。オランダ語が学ばれ始めたのは更に時代が過ぎてからで、医学者、本草学者が先であった。

〈村上, 3:198〉当日の日誌を引用すると：「筑後殿から我らの中にドドネウスの植物誌をポルトガル語に翻訳することのできる人はいないかと尋ねられ、1人もいないので、そのような書物を翻訳することは我らの間で容易にできることではないと答えた。」

(41) 当時、実際には中国以外ではオランダのみが貿易を許可されていた。

コイエットは日本人がオランダ語を話さず、オランダ人が日本語を話さぬことにいらだちと憤りを前回の訪日で、特に江戸城での交渉の非能率さの中に感じていた。

〈村上, 3:199〉コイエットの1月23日の日誌から医師がしばしば呼ばれている。：「我らの医師が皇帝（將軍）の最も有名な歌手で喜劇役者（実は謡曲師のこと）である七太夫（喜多英村）の許に招かれ、その胸と肩との大きな腫物の治療を頼まれたが、甚だ危険で切開せねば治らぬと言ったところ、気の弱い人で承知せず、長い間苦痛に耐えて己れの残りの体力と貼った膏薬の効果を待つと言った。」続いて翌1月24日の日誌より、：「我らの医師は夜8時頃前記の七太夫に膏薬を届けに行った。筑後殿はこの病人が高齢であるため強い薬を与えることを禁じ、速からず死亡した際に医師が死の原因であるとか、それを早めたのであるとか思われぬよう（に策を）計られた。」

(42) とは言え、当時、外国語（中国語、ポルトガル語、オランダ語）が理解できた日本人は今日から見ると驚くほど少数であった。

(43) 西洋中世のギルドとの比較はすばらしかったが、そのような自由は日本にはなか

った。通辞は特別世襲制の役職で正通辞、付添通辞、通辞見習いなど厳しい階級制度があった。その後、語学力よりも家系が重視されて来たため、語学力の低下と相続された家系の名誉と権力の悪弊が重なった。

また、著者ミュレーンはペリーの黒船の訪日を鎖国を破った事件として非常に高く評価している。

- (44) コイエットは自然科学者ではなく、あくまで普通のヨーロッパ人の感覚で日本を見ている。原文では「小麦の種を播く」である。当時の日本では普通、春に畑に野菜の種は播くが、麦は秋に稲の収穫後に種を播き、冬を越して育て、稲作の始まる前に刈り取るのが普通であった。

〈村上、3：202〉2月5日（和暦正月8日、鬼やらい）：「昨夜、我らの宿の（下）僕らの1人が例年の通り鬼を家のどこにも居られぬようにし、また国外に追放して、今日から始まる春の作物も、1年中の果物、その他も雹、雷、暴風等の災害を免れるように、手に1杯ずつの豆を天井や室の角々に投げ掛け、その芽を出すまでは帰ってはならぬと言ったが、予防のために豆は十分に炒ってあった。」

- (45) 現在まで伝わっている「豆播き」とほぼ同様である。これも新年を天災地変から守り、安心して送ろうという願望からでた宗教行事で土着の宗教と習合もし、男女が和気霽々する社会的行事へと変わって行ったのであろう。西洋人を鬼としてコイエットたちが豆を投げ付けられなかったのは幸いであつたし、また、「福は内（家）鬼は外」の話は聞かなかったのであろうか？

- (46) 原文では「偉大な日」である。

〈村上、3：203〉2月11日：「皇帝への進物を明朝8時に宮中に届け、予も同刻出頭するように筑後殿から沙汰があった。正午から7、8軒目の湯屋に行き、身体を清めた。」

- (47) 築後殿たちであろう。

- (48) 徳川4代將軍家綱。

- (49) 勿論、着ていたのは喪服ではなく普通の礼服の和服であつたろう。

- (50) 日蘭外交の大半は厳禁のポルトガル語を使用して行なわれていた。そのため、通辞たちの語学力も非常に低く、オランダの商館長も全權大使も全て日本側の解釈に立って解釈され、船長を意味するポルトガル語の外来語〈カピタン〉という語で呼ばれていた。日本に蘭学が起こり、蘭通辞が育って行き、幕府に重用されて行くのは更に後代の1700年代の後半からである。一方、本書の著者が日本にはメツケという密偵が全国的に手配されて外人の動きを内定していたと言っているが、出島にも入れず、外国人が話すオランダ語も解らず、一体、何を、どの位正確に

内定できたのであろうか、不思議である。

- (51) 彼は日誌に書いていないが、将軍に拝謁を受ける前に、歩き方から、お辞儀の仕方など、ありとあらゆる事をどの様にするのか、非常に厳しく詳細に指示を受けるのである。まず、将軍が退室され、商館長はその後、決して後を向かず、前向きで後退することが教えられている筈である。
- (52) 手前の部屋でコイエットを待っていたのは築後殿とヨシ殿（正しくはヨヘイドノであった。長崎奉行黒川与兵衛）及び、付き添い通辞、西吉兵衛たちのことであろう。

〈村上、3：203〉2月12日（和暦正月15日）「進物を出した後、予も宮中に行き、筑後殿に導かれて、一つの広間に入って、暫らく待ったが、多数の領主や坊主が来て、我らの歳や名を尋ねた。約3時間、そこに座っていて領主たちや少しでも宮中に関係のある人たちの告別式が終わった後に、筑後殿は両側に大臣たちの座っている大広間に我らを導き、そこからは通詞と2人のみ廊下の外側を2回廻って進物の並べてあるある所に着いた。そこから顧問官（目付役）安藤右京殿に導かれて、20～25フィートの所に黒い服装で直立していられた陛下（将軍）を見て、予は頭を下げた。その時、右京殿が『オランダ・カピタン』と叫んだ。これは同人が陛下に敬意を表するという意味である。暫らくして初めの広間に帰り、筑後殿、及び奉行与兵衛殿に別れて宿に帰った。」

また、日本側の記録として、〈蔵有院殿御実記巻5、承応2年正月15日の条〉：

「入貢の蘭人御覧あり、貢物はちよろけん2種、紗羅陀2種、純子1種、たひい1種、狸々緋1種、ささへい1種、綾紗1種、ふらた1種、羅紗1種、綿珍1種、花檀1種、一角1本、更紗1種、酒2種、自鳴鐘1、あめんどう1種なり。」（尾張記、水戸記）

- (53) 当時の日本では非常に高価な絹のきものであったが、ヨーロッパ人にはそれ程の値打ちはなかった。

〈村上、3：205〉2月15日の日誌：「正午頃通詞たちが宮中から皇帝の賜品として上衣30襲と帰任の許可を持ち帰った。通詞にも上衣2襲を賜った。これを渡されたのは安藤右京殿と筑後殿とであった。」

- (54) 原文は「カステイリア人」であるが、確かに「カステイリア（城）風の砂糖菓子」である「カステラ」は品物と共に名前も日本に定着したが、「カステイリア人」は普通の日本人には未知な民族であろう。イベリア半島にカステイリア王国を築いたカステイリア民族はかつてのローマ帝国の版図内のキリスト教国をイスラム勢力圏から奪回するという十字軍の大儀名文をローマ法王より受け取り、「レコンキ

スタ（再征服）運動」を起こし、イベリア半島の近接民族やイスラム勢力までも征服し、（それが現代スペインの内政問題にまで影を引いているが）、更に新大陸発見後は文字通り全世界征服を企てた。日本ではスペインの名前で親しまれているが、スペイン語は言語学的にはカステイリア語であり、カリブ海諸島や北、中、南米などで話されているスペイン語はノーバ・カステイジャ（新スペイン語）である。

(55) ここではキリスト教の布教のことであろう。

(56) 〈村上、3：206, 207〉2月16日の日誌：「指定の時間に商務官補レセウトと共に筑後殿の邸に行ったところ、奉行与兵衛殿も居られ、筑後殿は先ず我らが宮中から早く返礼の品と帰任の許可を得た事を喜ぶと言い、予が自ら宮中に招かれなかったのは皇帝が新しい命令を出される必要のない時は通詞が出る事となったため、悪い感情や軽蔑のためと考えてはならぬと述べられたが、これは予がこのことについて不満の意を通詞に伝えたためであろう。

彼はまた皇帝がローマ・キリスト教を伝えて、その臣下数千人が死刑に処せられたり、国内居住を禁じられたりするに至らせたポルトガル人やイスパニア人に対して甚だしい嫌悪と忿懣（ふんまん）を抱かれ、我らを平戸から長崎に移らせて奉行の厳重な監視の下に置き、カピタンの1年交代制を定められたのも、万一、その中に帝国の害になる信念の人があっても、任期の短いために心配がないからであった。この国の不利を謀（はか）る者のある事を聞いた時には、長崎の奉行たちが他の人々から聞く前に知らせれば、皇帝は常に我らを厚遇されるであろうと述べられたので、予は我らはこれまで通り忠実に命令を守る旨を述べた。……」

その後、コイエットたちの江戸出発は2月22日であった。途中、3月8日（和暦2月9日）大阪（大坂）から船出しようとしたところ、船頭たちが9の日の旅立ちが縁起が悪いと言いだし、コイエットが理解しないままに、立往生する。〈村上3：209, 210〉3月8日：「今日は出発したいと思ったが、彼らは月の九（苦）の日に水上旅行を始める事は不吉であると考えて、陸を離れようとしな。出帆はこの迷信のために妨げられた。旅行に必要な品と注文品の代価や宿泊、飲食の費用を宿の主人に払ったが、今回のように不注意と不親切を重ねれば、その利益が減少する事を知らしめるため、進物は与えず、シャム向けの上衣を注文するため、小判100枚を渡した。」

そうこうして、長崎到着は丁度、江戸出発1月後の3月23日であった。

〈村上、3：210〉3月23日の日誌：「正午、長崎に着いて、館内に別状のない事を見て神に感謝した。商務員ボウヘリヨンの記録に、予の不在中の諸事の内、重

要な事件として載せてあるのは、奉行喜右衛門が三郎左衛門の子息と町年寄右衛門同道で我らの住居の予の室に来て、しばらく玉突きをした後、館員一同に『火の用心』をするよう話したこと。』

コイエットは立腹したであろうが、この時代に既に日本人が玉突き（撞球、ビリヤード）をたしなめ、やって見様と思って、弄ってみたことに、文化史的に意味があると思う。単に医学者のみならず、普通の日本人も異国の文化文物に非常に大きな好奇心を持っていたものと思われる。キリシタン布教の大成功とその後の大悲劇も日本でのみ起こった日本的なものかも知れない。この後、アジア各地で西欧人との衝突が起こるがその主導者がクリスチャンであったことが多いが（中国の西欧化に反対した「太平天国の乱」などその1例である）、日本ではクリスチャンが自国の為政者に反対し、西欧人の側に付いて最後まで戦った。（「島原の乱」などその1例である）コイエットもこの直後、タイオワンのゼーランディア城で中国人と戦うが、それまで友好的であった現地のクリスチャンが全て反西欧人側に立ち、中国人を助けた。結局、コイエットは敗北し、台湾におけるオランダ東インド会社のみならず、オランダ人が長年コツコツと築いて来た全権利と全勢力の撤退という歴史的な悲劇の主人公となり、オランダ東インド会社のドンから死刑囚へと転落の余生を送ることになるのだが、日本在住中の彼には会社の発展と自分の栄誉出世の夢しかなかったのであろうか。

- (57) 原文は「ガウワタツラ」である。河太郎祭、河場河童（かっぱ）祭である。〈村上 3：215〉6月24日の日誌：「日本の5月29日は河太郎の日で、山伏という悪魔の司祭からバンブー、即ち、大きな葦（著者の誤解で「笹、もしくは竹」である）の束に祝い紙を付けたものを河の中の諸所に立ててカッパを祭らねば、入浴（水泳、水遊）（オランダ語もスウェーデン語も英語と同様に「入浴」と「水遊び」の区別がない）する人たちを溺死させると言い伝えられ、市の住民はその子供のために皆少しずつ彼に寄付をするのである。」「カッパ」は、「カハワッパ」の略（広辞苑）「ワッパ」は「輪」のこと、「河にはまり込んで水死する」と理解されたのであろうが、江戸時代には全国的に行われていた水難予防の神祓行事であった。宛て字が「河輪」や「河馬」とならず「河童」となったのは、芥川龍之助の「河童」からか。「河場」からの転音も考えられる。

- (58) 河童のことだと思われる。原著者は誰かの説明を開書きしたのであろう。

- (59) コイエットは長崎に集まる中国人の中の数名を中国周辺の情報収集のために私費を出して雇っていたようである。

〈村上、3：215〉6月25日の日誌：「中国人たちの話では数年前にタルタリア人

に捕らえられた「一官」が北京の牢を脱出して、その子「国姓爺」の所に來たので、同地の戦争は激しくなり、貿易品の輸出は減ずるであろうと言う。」

- (60) スパイがどのような政策を取り調べたのか、不明だが、各地に騒擾事件は多かったらしい。慶安4年(1651年)には江戸の牢屋に繋がれていた牢人由井正雪や丸橋忠弥たちの謀反が発覚して処刑されている。これも事実とはともかくも、密告や内偵の結果の事件かも知れない。

〈村上, 3: 215〉6月26日の日誌:「未知のヤマボーズ(山坊主)が江戸から当地に来て、皇帝の命令で密かに政庁と市民の状況を視察、探索していると伝えられる。このような人たちは種々の偽装で全国に派遣され、その間、度々、変装するので諸人から恐れられている。」

- (61) 〈村上直次郎訳「バタヴィア城日誌」3: 118〉: 1653年2月1日の項の引用: 台湾の中国人反乱として、「この頃フォルモサの中国人が謀反を企て九千ないし一万の中国人がオランダ人に殺されたとの噂、タイオワンより伝わりたれば、アモイの住民はなほだ激昂し、もし王を恐れずは我が国人を打ち殺しならん。……」とある。その項の中村孝志の脚注には:「Fayet(郭懷一)の騒乱をさすものであろう。この乱は1652年9月7日夜、赤嵌(セキガイ)在住の中国人約4~5千が、アムステルダムボルデルの農民領袖(結首)五官郭懷一(Gouqua Fayet)(最後にnの校正ミスがあり、Gouquanが正しいと筆者は思う。)らの下に蜂起し、同地在住のオランダ人8名、黒人若干を惨殺した事件である。……」とある。

〈村上3: 216〉7月16日の日誌:「昨夜半頃、リブシエンの船が入港した。同船は5月30日シャムを出たが、館長クライエルスは9月22日死去、同地の会社員は国王の命令で旧住宅を出て、河口に移転して、王がバタヴィアに依頼した援軍の到着を待つことになった。この際に中国人と日本人の一部が、我らの特権を停止させようと謀ったが失敗し、今はことごとく従来通りとなった。2月にはトンキン船が一隻河口に着き、荷物を積み終えて直ちにバタヴィア向け出帆した。国姓爺のジャンク4隻とタイオワンの船1隻はその後から同所を出帆する筈であった。シャムの会社は前記の理由で鹿の皮買い入れを甚だ少なくし、バタヴィアからの船は1隻も来なかったが、フォルモサではバタヴィアのジャンク船1隻を見た。去る9月タンコイヤ(高雄?)では我が軍が反乱中国人約三千を殺し、その余を降伏させたが、この戦で約三、四千を失ったという。これらの話の実否を明らかにするため我らの船の到着を待っている。」

- (62) 切支丹の嫌疑が掛けられ、惨たらしく尋問され、更に暗示でも掛けられたので精神的に攪乱した結果であろうが、当時はそのような判断は採られなかったのが残

念である。

〈村上，3：218〉7月20日の日誌：「当市の老婦人が2日前に突然、非常に恐ろしいことに会い、オー・イエスよと言ったために、直ちに奉行所に連れて行かれ、牢に入れられ、その主人は裕福な婦人であったが、このために疑われ、家具、衣服、一切を取出して、何かキリシタンに関するものはないか嚴重に調べられた。」

- (63) 原文は「おう、イエス！」であるが、時代考証してみると、当時の切支丹の間ではマリア信仰が相当に強く、苦難に逢うと多くは「ビルゼン・マリア（処女マリア）さま、お助けを！」と祈っていたようである。カトリック教徒の切支丹たちが、現在のプロテスタント教徒のように、「イエス・キリスト」を直接、呼称することは非常に珍しく、やはり、「御天主さま！」とか、「大アウスさま！」と言っていた様である。（スウェーデン人である著者の目で見ただためであろうか。）

- (64) 原文は「オウダウラ」であるが、小田原領主美濃の内匠の守であろう。

- (65) 原文は「ミキノタコモンドノ」であるが、牧野内匠の子息佐渡の守であろう。

- (66) 原文は「国務大臣」である。

- (67) 原文は「クジョ・ヤマツサマ」であるが、久世大和の守であろう。

- (68) これも著者の誤解で、年表によると将軍家光は1651年6月8日に割腹自殺している。コイエットの日記のこの部分は1653年であり、実際は一昨年である。〈村上，3：219〉7月20日の日誌：「牧野内匠殿の子息佐渡と同じくオランダ人に好意を表した小田原の領主美濃様と久世大和様は前皇帝に随行するため、自ら切腹（追腹）した人の代わりに顧問官（？）に選ばれた。」

- (69) この殉死、「追い腹」の習慣は古代中国からの伝来であり、王や長者が死ぬとその寡婦、要職の家臣、寵愛された使用人などが殉死したが、中国でも早くから土人形や土形に代わり、日本でも埴輪に代わったが、ある天皇や將軍などの死には残っていた。寛永3年（1663年）徳川幕府もこれを禁止している。しかし、著者の次の引用の様に明治天皇御崩御による乃木將軍の追い腹は全国的に多かったと語られている。

- (70) 彼の本名は Nicolaes Verburgh 1638年に商務員補として東インドへ渡来、40年、スラットへ転勤、42年、商務員へ昇格、アグラ商館長となる。46年、上席商務員へ昇格し、ベルシャ商館長となった。50年、タイワン総督。54年インド参事会員外参事へ。57年、参事会員に選出された。67年、貿易事務総長、兼、司法裁判所長官となった。75年、帰国艦隊司令長官としてオランダ本国へ帰国したが、その翌年（76年）、デルフト市で死亡。（村上の前掲書より引用）

〈村上，3：222〉8月7日の日誌：「……4時頃帰り、船はその少し後に定泊所に

着いた。同船はフロイト船ウィッテ・パールド（白鳥）号で、7月20日タイオワンの港を出たが、女島の辺で風がなくなり、当地に着くまで8日を費やしたと言う。その持参したフェルブルフ君の書簡と書類で知ったのは前に当港から出帆した諸船の安着、我らの書簡と別に中国船に託したものを受け取った事、昨年デルフト（号）とクー（号）両船の内、1はタイオワン港から流されて行方不明、他は広南の沿岸で沈没し、乗組員6人のみが救い出され、国姓爺が6ヶ月間留置いた後に、バタヴィアに送った事、フォルモサの中国農民が、その首領ガングワイの部下が起こした暴動のこと、彼と部下約三千人を撃滅して、今は平穏になった事、昨年タイオワンからカントンに派遣した人たちの経験から、今年はバタヴィアから2船を同市に派遣する計画は同市とタルタリア人の治下にある地方で自由貿易を許される望みがあるためという事、死去されたレイニールセンに代わってヨアン・マートゾイケル閣下がインド参事会から総督事務を委任された事、コルネリス・セザール君が6月16日タイオワンに着き、同18日フェルブルフに代わってフォルモサの統治に当たることになった事、フロイト船スミエント号がバタヴィアから同時に出帆した船より14日も遅れており、マカオの辺で暴風に遭ったかと心配している事、オランダがイギリス共和国と開戦した事、ハッパルト君が予の後任としてバタヴィアから当地に来る事などであった。……」

- (71) コイエットと村上の「バタヴィア城日誌」と著者のムレーンとの間には同一の人名や地名にもスペルの違いがある場合には、特別な場合以外は、本書では村上式にしている。
- (72) また、ここで著者の日本学の披露が始まる。
- (73) 原語は「家事手伝いの女」である。
- (74) 日本もアジアの一国であり、カースト制度があり、カースト外の階層があったことが旅行者の耳にも入り、それを記したのであろう。コイエットが直接に観察したことではなくて、伝聞であろう。

〈村上、3：226〉9月3日の日誌：「7名処刑された。うち下女1人は磔（はりつけ）に、1人は父親殺して斬首の刑に処せられた。その他、男子の放火犯とジャンクの荷揚げ中に銀750匁を盗んだ人夫3人であった。」

「当地では牛馬その他の皮製造人が死刑の執行に当たり、他の市民とは別の所に住んで、大いに卑しめられている。彼らよりも身分が低く卑しめられるのは、貧しい親たちに対する御恩返しのために己れを捧げる若い娘たちを買い取って汚い哀れな生活を強要する遊女屋のみである。死刑執行人は処刑に必要な十字架その他を無料で提供せねばならず、招かれなければ市民の家に入ることはできぬ。」

- (75) コイエット自身名前が示すように移民の子であり、ストックホルムで生まれたが、異質なスウェーデン人であった。幼少の頃、ロシア帝国の首都サンクト・ペテルスブルグに移り、波乱の多い多感な少年時代を過ごした。学業はスウェーデンで積んだが、スウェーデンでは好い職が得られず、当時の花形産業とは言え、外国の会社に入り、地の果てまで行き、過激な生存競争の嵐の中で、人生を生きぬいて来たのであった。いつも冷たい視線で見られ、事ある毎に不当な差別と誤解の渦の中にあり、あげくの果てには濡れ衣を被せられる自分の身にも通ずる社会で差別された階層があると聞くと強い関心と同情が湧いたのも当然であったが、1960年頃、取材のために来日した著者ムレーンも名が示すようにドイツ系移民の子でもあった。そして、アジア第一の近代国と自負する日本に、そのような前近代化の残滓として社会階層外階級が存在し、市民生活の上でも問題視され、結婚、就職、社会生活に暗い影を投げ掛けている現実非常に驚いたであろう。21世紀の現在では社会環境や価値観の変化に伴い確かに問題も改善され、表面的には問題はないと言われてはいるが、最早、問題ではないなどと言い切るところに問題があるのかも知れない。また、原書にある各種の差別用語の直訳は避けた。
- (76) これは著者の誤解ではないだろうか。当時、「夜警」は「火消し組」などがやっていたと思われる。
- (77) 島崎藤村の名作「破戒」にもこのような表現がある。英訳、仏訳はヨーロッパでは多くの人々に愛読されている。
- (78) 著者が何を根拠にこのような事を書いたのかは不明である。
- (79) 確かにスウェーデンのみか北欧各地に「タツタレ」と呼ばれる「シゲーナレ」（ジブシー）とは「似て非なる」少数民族が居る。また、この人々の起源や文化や生活や歴史や社会などに関する研究も比較的多数あるが、決め手はない。
- (80) ここにこの問題に関する著者の記述があるが、差別用語もあるので翻訳は割愛。
 〈村上、3：227〉9月7日の日誌：「島（出島）の外圍の近くを日本（人）の僧の死骸が流れていた。多分、洪水の際、川に溺れたのであろうが、誰も届け出ないのは、この地では引取人のない時には、届け人が遺骸の始末を命ぜられるからであらう。」
- (81) 〈村上、3：232〉9月20日の日誌：「五島の日本人夫婦がキリシタンのしるしとなるものを所持していたために、足吊りの刑に処せられた。」
- (82) 〈村上、3：233〉9月22日の日誌：「日本の8月1日で、この日だけは奉行が市民から物を貰うことを許されるので、市民が贈った物は80,000匁に上がり、1匁は57ストイフェルで換算すれば22,800グルデンとなるが、その品は銀貨、絹織物類、

銅銭の束などで、貧しい人たちは皮足袋、草履などを贈り、彼らの中には贈り物を惜しむ者や、進物を怠ったり咎められはせぬかと心配する者もある。」

(83) 長崎奉行、黒川正直与兵衛のこと。

(84) 長老吉兵衛のこと。

(85) 〈村山、3：234〉9月25日の日誌：「与兵衛（長崎奉行）は我らが船の到着を遅らせて銅その他の購入品の十分に持ち込まれる事を望み、商人たちはそのため多く持ち込み過ぎて困る様になると考えているように思われ、その考えの誤りを説くことを通詞たちに頼んだが誰もそれをせず、長老吉兵衛さえもハッパルト君列席の所で、奉行が例の通りの不機嫌な面相で畳を板だと言われても、奴隸的服従の義務として、静かに同意の返答をせねばならぬと言った程である。」

これは現代の日本でも権威者に反論を述べて説明するよりも、何事も黙っていて、誠しやかに聞き入った方が謙遜で優雅な人物と認定されるのが普通である。やはりこれは現代日本人にも通じる典型的な日本人のメンタリティではないだろうか。

(86) 特にタイのアユタヤは当時は活発な貿易港であった。

(87) 鄭經のことで国姓爺（本名は鄭成功）の息子である。

(88) 〈村上、3：235〉に9月28日の日誌があるが、内容が同じなので引用は割愛。

(89) Argus：ギリシア神話の神名だが、日本では英読み「アルガス」とギリシア語の読み Argós「アルゴス」の両方が混用されている。古代ギリシアでは単なる「閃光の神」であつたらしいが、その後、神話の集大成課程で物語が創作付与され、「100の眼を持つ何でも見通せる神」、まるで日本の「千里眼」の様な神へと昇格し、「悪事、隠し事など、何でも嚴重に取り締まる神」へと転じて、現在でも英語などに Argus-eyed「アルガスの眼を持つ（抜け目ない、狡い、油断ならぬ）」などの形容詞も派生したが、一方、Areg「光輝く」、Argentum「銀」の方へも転化した。英語の Argue も「論争する」よりも「明白にする」の方が元来の意味であった。さて、超人的英雄の彼の物語には、更に人間的な説話物語が付与された。悪魔により（実は片思いの嫉妬により）小牛に姿を変えられた美女イオの護衛を勇者の神ヘラから任された時、彼アルゴスはヘルメスの奏でる美しい笛の音色に酔い痴れて眠りに陥り、小牛の美女イオを盗まれてしまった。怒りに狂ったヘラはアルゴスを殺し、彼の眼を孔雀の尾羽にちりばめた。それ以降、全世界の孔雀の尾羽にはアルゴスの美しい眼の模様が付いて来た。それによりタイ、マレー産の美しい眼のような模様のあるアルグス孔雀（Argusianus）やアルグス蝶（和名：ジャのめちょう）が命名されている。

アルグス（アルガス）という同名の神がもう一つギリシア神話に登場する。フリクススという神の息子で四つの海（当時の全世界の海）を速く、無事故で航海（多島海のギリシアでは至難の業）するアルゴー船を発明した神もいるが、本件とは無関係だろう。

〈村上，3：238〉9月7日の日誌：「今日は売った品の引渡しで忙しかったが盗まれた品も多く、……この盗みは毎年、嚴重に取り締まり、訴えもしているが、買う人よりもすりの方が多いからである。……倉庫ではその家主の下僕がすりの番をした。」

- (90) キリスト教国から日本を見れば邪神邪教の国であった。そのような見識から十字軍、全世界宣教師派遣論、近代の植民地主義的宣教師派遣が起きたが歴史的誤謬までは気が付いていなかった。本書の著者ムレーンにしても、カトリックの宣教師事業には批判的であったが、自国のプロテスタントの宣教活動には非常に好意的である。しかし、それは単純な自国愛であり、我田引水以外の何物にも思えない。
- (91) 社寺が飾られ、善男善女が参拝し、御神輿が町中を威勢の良い若者に担がれ練り歩く日本のお祭りの風景を社会学者ではなく、善良なクリスチャンの眼で見た感想である。これは諏訪神社の大祭だが、各地で行なわれる秋の（収穫感謝の）大祭も同様と思われる。
- (92) 〈村上，3：244〉10月28日の日誌：「日本の9月7日。ある偶像の大祭日で、甚だ華美な多くの造り物、見せ物、遊戯などがあり、市民の一部がその宮から取り出した甚だ美しく、色々装飾したみこしを奉行邸下の平地にある藁小屋に納めた。」
- (93) 〈村上，3：244〉10月30日の日誌：「日本の祭の2日目で、前述の偶像を前の通り、多数の人が取り巻いて、その宮に納めた。」
- (94) 「乙名」のことであろう。江戸時代では通例、町の宮座の指導的な地位を持った現代の町内会長的な人物のことだが、長崎の町を統治していた指導的な立場の高級官僚的な役人をそう呼んでいたとも考えられる。また、コイエットも気付いていないが、自負心の強い人間は（洋の東西を問わず）決して人の指図には従わないのである。コイエットの名案も奉行には（当然ながら、また結局は）窮地に追われた鼠の戯言としか響かなかったのである。奉行は、何事も慌てずに慣例に従って運んで行くのが当然で、流儀なのだと答えたのである。
- (95) コイエットは誰からその様な話を耳にしたのか不明だが、江戸参府を2度も共にした付き添い通辞西吉兵衛など人間的にも鍊成した資質を持った人、特に奉行とオランダ人の中間に入り、両方の言い分が理解できた人物から密かに聞きつけたこ

とであろう。日誌や文中の「ニシドノ」が彼だと思われる。この噂も、「崖淵を歩む者は崖淵に落ち易い」という諺の再解釈で、「……は突き落とされ易い」とも言われ、更に「他の腹を切る者は自の腹を切らざるを得ぬ」ようになると言われたのであろうか。

- (96) それはコイエットのひがみであり、彼への個人的な恨みだろうが、例え、神仏の様な人でも、人は時と場合により、邪にも鬼にも成れるものである。平戸オランダ商館を取り壊して出島に移れと命じたのも一奉行だし、島原城を大砲で攻撃せよと命じたのも一奉行である。コイエット自身は金庫に厳重に施錠して保管されていた長崎商館日誌を当時はまだ読んではいなかったであろうが、バクビアあたりで話として聞いてはいたであろう。特にその当事者であって義弟のフランソア・カロンは語っていたと思われる。
- (97) 〈村上3：245〉10月31日（和暦の9月10日）の日誌：（ムレーンと日付が1日違う）：「奉行与兵衛殿は通詞や乙名たちが船の出帆を促進しない事を責め、もし9月20日までに出帆させねば、彼自ら出島に来るであろうと言った由。彼は危険な人物で、2年間に家人7人を死に至らせ、彼自身も切腹すると言った程で彼の如き人は、その他にはかつてなかったという。それで必要な事を適当に彼に話し得る人がなく、不当な待遇や暴力を忍ばねばならぬと言う。今日は夕刻までに銅千箱を開いた後に封印した。」
- (98) 〈村上、3：246〉11月8日の日誌：「ファルク（鷹）号の積荷を終わったが銀6,70箱はまだ商人たちから受け取るべきである。漆器を少数の優良工より買い受ける許可を願い出たが、奉行は何でも安く売って利益を収め、貧乏な者は少しも儲けることができなくなると言って許さなかった。樟腦の商人は再び3万斤の売込みに来たが、時間の余裕がないため嫌々ながら断わった。両方の迷惑である。」
- (99) 前項〈村上3：246〉11月8日の中の1部に、「漆器を少量の優秀工より買い入れる許可を願い出たが、奉行は最も富んだものが、何でも安く売って利益を収め、貧乏なものは少しも儲けることができなくなると言って、許さなかった。」とあるが、この箇所は著者ムレーンの曲解かも知れぬが、オランダ語原典が入手できぬ点が残念である。
- (100) コイエットは商館日誌を11月12日まで書いている。後任のハッバルトも11月10日より書き始めている。コイエットがフロイト型帆船「カンパン（戦闘）号」で長崎を離れたのは11月13日の早朝であった。

〈村上、3：248〉11月10日、コイエット商館日誌の最後の部分：「ハッバルト君が奉行の許可を得て、予の求めた書類を携え、孫兵衛と共に船まで来たが、乗

船は許されず、総督、並びにタイオワンの長官宛ての書簡に、予と一緒に署名した後、築島に帰った。取引簿は時間が足らぬため、彼に渡さなかったが、決算の結果、本年の輸入品は100分の103、2/3に売れ、渡来の諸船には銀、銅、及び穀類で1,812,044グルデン、15ペニイに売れるものを積み込んだことが明らかになった。全能の神が、これを安全に希望の港に到着させ給わんことを願う。」(この後に中国人ジャンク55隻を利用して長崎まで運搬させた商品の明細表があるが省略。)

著者のムレーンは一ハグにある「一般公文書保存館」で「長崎商館日誌」を閲覧したし、1962年、日本を訪れ長崎でも調査研究も取材もされ、その方面の研究者からも意見を伺っているのだが、内容的に多少の誤解とずれが生じている。また、彼の状況判断にはどうしても外人としての眼界を感じるが訳者としてはできるだけ彼のものをお伝えしたい。

- (101) 本著者ムレーンの中国語の表記法には独自のものがあり、本項も各々、Tsuanchou, An-hai, Che-kingである。泉は現在、福建省であり、宋代には南宋であり、著者の「泉省」は誤解か？村上直次郎訳、中村孝志校、バタビア城日誌、第1巻101ページ、以下〈村上、バ、1:101〉のように略記には：「鄭芝龍……は泉州南安県石井の出身」とある。
- (102) 彼がどのようにしてマカオにやって来たのか、著者がどのような伝記本を元にしていって投石事件を知ったのか不明である。この話には大きな矛盾がある。当時の中国で社会階級の違う者の子供同志が一諸に遊ぶなど考えられない。また、漢人と満州族の子供同志がどうして共に遊び、共に言葉が通じたのであろうか。
- 〈村上、バ、1:101〉には「……少時母方の祖父を頼ってマカオに移り、仕立職を業とした。」とある。
- (103) 彼のクリスチャン・ネームは Nicholas Gasparde であった。彼が洗礼を受けてクリスチャンとなったことは、その後、オランダ商館で仕事を貰う切っ掛けにはなったであろう。中国人社会では西欧的な名前はい用いらなかったが、外人疎開地で通用する現地人の唯一のアイデンティティであった。
- (104) 著者は「泉から水が湧き上がるように、少年が出現した」というレトリックを利用したかったのであろう。ただし、地名の che-king「石井」を「泉」としている。
- (105) 彼が日本へ来て田川の娘との結婚した記録は多い。原文には長崎とあるが、著者の誤解考と思われる。〈村上、バ、1:101〉「……後、日本に渡り平戸に住し田川氏の女を娶り、福松(後の鄭成功)、次郎左衛門(七右衛門)らの子を設けた。」また、伊藤潔著「台湾」中公新書、25ページ、以降〈伊藤、25〉と略記によると、

「鄭芝竜は日本の平戸に滞在中に日本人女性の田川氏と結ばれ、1624年に長男の鄭森（ていしん）をもうけた。」とある。

- (106) 〈村上, バ, 1, 101〉「ついで1624年初め頃、台湾に渡り、東インド会社の通訳として働くとともに、また貿易商、あるいは海盜として活躍した。」
- (107) 〈村上, バ, 1: 97〉(ジャックス・ルフェーブルが1628年6月1日に記したバタヴィア城日誌): 「我らはまた中国の海賊が海上の主となり、我が国人(オランダ人)はこれに対して退却の余儀なきに至りたりと開けり。賊一官はジャンク船一千隻を有し、しばしば陸を襲い、陸上20マイルの地まで住民を逐い、アモイおよびハイトン(海澄?)を占領し、これを破壊焚焼し、また人を殺したれば、諸人皆彼を恐る。……」
- (108) 〈村上, バ, 1: 101〉: 「……(16) 28年福建巡撫熊文煊の招撫を受け明朝にも仕えて海防に当たり、30年には都督に任じられた。官権を用いて敵手を倒し、いわゆる海寇を掃討して海上権を握り、日本・南海貿易にも大活躍をした。44年明朝が滅びると、福王、唐王に従い勢力の回復を図ったが、やがて清朝に降り(1646年)北京に送られた。そしてなおも反清活動を続ける一子鄭成功の招撫に努めたが、これに失敗して殺された。」
- (109) 〈伊藤, 26〉: 「唐王の福建政権はまさしく鄭一族の勢力を基礎としたものである。この時、21歳の鄭森は隆武帝に拝謁し、「朕にはそなたの妻として与える娘のいないのが残念である。朕を忘れず、忠義を尽くせ」との言葉と明王朝の姓(国姓)である『朱』を授かり、名前も『成功』と改められた。これが『国姓爺・鄭成功』の由来である。」
- (110) ここで誤解を避けるため、近松の「国姓爺合戦」と一官父子の反清再明・台湾攻撃(事変)との史実の違いを管見だが、述べておこう。近松の国姓爺合戦は1715年(正徳5年)11月、大坂竹本座で初演、近松63歳の時の名作で、3年越しの17ヶ月に亘る興行がされた人形浄瑠璃史上比類なき傑作であるが、歴史劇ではなく、歴史的素材で愛国心、特に皇帝への忠誠心、国を越えての親子の愛情、義理と人情に挟まれた人間の自殺による解決、勇者の虎退治と敵兵の従属など、当時勃興していた日本の国家主義、中国という異国趣味、愛と憎しみ、荒事と濡れ場、義理と人情など当時の中産階級の意識を巧みに組み合わせた傑作である。「あらすじ」を大久保忠国編、鑑賞日本古典文学29、近松、角川書店(p. 196, 197)から一部引用すると:

(第1段) 明の思宗烈皇帝の代、右大臣李路天(り・とうてん)が韃靼(だたん)に内通し、兵を導き入れ、皇帝は暗殺され、城は落ちる。忠臣呉三柱(ご・さ

んけい)は皇妃の死骸から皇子を取り出し、皇女梅壇(ばいたん)と共に船に乗り難を逃れる

(第2段)呉三柱一行は九州平戸に漂着。平戸には元明朝旧臣鄭芝竜(りゅう・しりゅう)が一官という名で在住。祖国の大事を聞き、明朝再興を願い、妻と長男和藤内(わとうない)の三人で唐土に渡る。和藤内は母を背負って竹藪に迷い込むが猛虎を捕らえ従え、虎狩りに来た韃靼兵も捕らえて従わす。

(第3段)一官の唐土の遺児は成長し敵清朝五常軍甘輝(かんき)の妻(綿祥女)になっていた。しかし、妻の縁の和藤内には同情はするが、味方はできぬと断言。ところが綿祥女は自害して夫へ実父実弟への助け立ちを頼んだ。(この甘露館の段が最高の見せ場であった。)そこで甘輝も味方となることを決意する。そして、和藤内に国姓爺の号を与えた。一官の妻も甘輝の妻、継娘の見殺しは義理が立たぬと言い、国姓爺と甘輝が相和して戦えと遺言して自殺。

(第4段)和藤内の妻小陸(こむつ)は梅皇女、呉三柱、幼君を連れて来唐。老爺二人が碁を討ち国姓爺の戦勝を予言(碁立軍法)小陸は苦難の後一官たちと再会。後を追って来た韃靼兵も奇計に掛けて討伐する。

(第5段)国姓爺、呉三柱、甘輝は幼帝を擁して合一した。一官は一人で韃靼王必殺の覚悟で牙城南京城に向かった。それを国姓爺たちが追ひ、一官を助け、韃靼王と逆臣李踏天を捕らえ、幼帝を奉して明王朝再興を達成。

結果的には劇と史実は逆となったが双方ともそれなりに時代を語っている。

- (111) 著者ムレーンの記述の資料が不明だが、史実認定に問題がある。〈伊藤, 30〉: 「台湾に到着して1年足らずの1662年5月に鄭成功は反清復明の志を遂げないまま、波乱に満ちた39歳の生涯を終えた。その死後、オランダを追い払い、台湾を開拓した功績を讃える移住民(の間)に「開山王」と(称され)崇められた。台南に「開山廟」が建てられた。清王朝時代の1874年に至り、勅令を得て「延平郡王祀」が建廟され、正殿には鄭成功、後殿には母の田川氏が祀られている。鄭成功の人気は日本にも及び、江戸時代には近松門左衛門の「国姓爺合戦」がある。また、台湾を領有した(戦前、戦時中の)日本は「延平郡王祀」を「開山神社」に改め、鄭成功の神格化にあずかった。」
- (112) 第五列: スペイン内戦の際、フランコ將軍の麾下のモラ將軍が首都マドリードを4個部隊で攻めた時、市内には内通呼応する第5の部隊が居ると揚言したことから内通者、同調者、裏切者の隠語としてLa quinta columna (第5番目の柱)が使われ始めた。columnaの和訳の「列」はどうだろうか。原語の意味は柱、部隊もあるが、新聞や雑誌のコラム(欄)、列、段、などである。著者はこの単語が好きらし

く本書の各所で使っている。

(113) 〈伊藤, 25〉:「鄭森(鄭成功)は母と弟と共に1631年中国に渡った。」

(114) 一官と日本との関係を村上は長崎オランダ商館日記, 第2巻, 序説にまとめている。〈村上, 2:2, 3〉(文中の「支那」はすべて「中国」とした。):

「中国大陆の戦況がこの日記に見えるのは, この年(1645)年7月25日, (正保2年6月3日)清軍が北京を占領し80万の大軍を南進させたところのが最初で, これは同月23日についた南京船の伝えたものと思われる。1646年1月8日(正保2年11月22日)入港の南京船で長崎に来た林高は明国の水師総兵官, 催芝からの正京皇帝(將軍)及び長崎王(奉行)宛の書状を奉行に呈し来使の主旨が精兵三千を借り, 堅甲を買い入れることであると述べた。奉行は急使を出し, 催芝の書を江戸に届けたが, 井上築後守は老中の意見を聞いた上, 明国とは絶交300年に及んでおり, 願いの事を將軍に言上することはできぬ旨を使者林高に伝え, 速やかに帰国させるよう正保3年1月12日付の書状で奉行, 山崎権八郎に通知した。1646年1月上旬入港の南京船が南京陥落を報じ, 6月16日に着いた南京船の乗組員が頭を包んで弁髪を隠していたこと, ……が日記に見える。

南京は陥落し, 福王は降伏したので, 一官らは唐王を奉じて福州に抛り, 再び請援の使者をわが国に派遣した。その長崎到着は正保3年9月末頃で, 携えた書簡は隆武2年8月13日付け, 大師平虞侯, 鄭芝龍と署名し, 正京皇帝(將軍), 及び長崎王(奉行)宛の2通であった。

將軍家光に中国出征の意があり, 幕府では早くから密議が行なわれていた事は, 本日記第1巻の1643年12月16, 18の両日エルセラックが紀州侯邸に招かれた記事や, 翌年9月16日, 通詞らが馬場三郎左衛門の命を受けてバタヴィア総督がマニラ, またはマカオを攻める時に, 日本軍を派遣して助けるために大砲を載せた帆船の貸与を総督府に求めることがあろうとエルセラックに話したことなどから推して知れるが, 平戸一官として親しまれた(鄭)芝龍の書簡に接して家光は御三家老中諸大名と協議し, 紀州侯の如きは西国, 中国の大名, 小名の兵と十万余の浪人を集めた一軍の総大将として出陣を願い出た程であったが, 正保3年10月17日(1646年11月24日)に同月4日付の長崎奉行の書簡が着いて, 福州が清軍に攻略され, (鄭)芝龍は海上に逃げたことが明らかになって出征の議は止められた。」

(115) 〈伊藤, 27〉鄭成功の台湾占領, :「鄭成功は中国各地を転戦したが, その甲斐なく, 遂に1661年には福建のアモイと金門(きんもん)の二つの島の固守に力を注ぐ状況に追い込まれた。この時, 台湾のオランダ連合東インド会社の通訳で, 債務を逃れてアモイに来たカ・ヒン(何斌)が鄭成功に台湾の土地の豊かさを説い

で侵略を勧め、海図を献上した。鄭成功はアモイと金門の守備を長男、鄭經（テイ・ケイ）に託し、何斌を案内役に、自ら400余の艦船と25,000の将兵を率いて、同年4月に先ず澎湖島を占領し、続いて台湾を目指した。」

（参考文献）

村上直次郎訳，中村孝志校注，バタヴィア城日誌（全3巻）東洋文庫，平凡社，
村上直次郎訳，長崎オランダ商館日記（全3巻）岩波書店，
伊藤潔著，台湾400年の歴史と展望，中公新書，中央公論社，
寺田隆信著，物語中国の歴史，中公新書，中央公論社，
大久保忠国編，鑑賞日本古典文学29，近松，角川書店，
日本古典文学全集，近松門左衛門集3，小学館，
永積昭著，オランダ東インド会社，講談社学術文庫，講談社，

（2001年5月9日 受理）



国姓爺・鄭成功の肖像



En side ur Fredrik Coyets dagbok på Deshima 1647-48

コイエットの長崎商館日誌 (1647-48 年) の 1 ページ、左ページ写真版の解説。

訳者の管見だが 1647 年 12 月 12 日で始まり 15 日の最初で終わっている。右上の最初の部分はこのページの解説らしく「1647～48 年に掛けての江戸参府旅行の途上にある。」との書き込みがある。その内容は、

- 12 : 〈村上, 2, 185, 186〉より引用。(1647 年 12 月 12 日) カタビラの村 (?) で大坂第 2 の奉行、久貝因幡殿に会い、留守邸を訪問。進物を呈したことを述べてお礼を受けた。その後、急いで荷物と共に江戸に到着。通辞と宿の主人の息子を筑後殿と三郎左衛門殿の邸に急行させて、到着を報告。安着を祝し、予と同行者の氏名書、及び進物目録の提出を求めた。書記官への進物は以前より減らせ進物台は作るなどの注意があった。
- 13 : 〈1647 年 12 月 13 日〉荷物を解き、進物目録と氏名書を作り、通辞に届けさせた。正午、宿から約 1 時間の所で火災のため、約百戸が焼失した。
- 14 : 〈1647 年 12 月 14 日〉大坂の宿の主人から手紙と肴料、小判 1 枚が届いた。
- 15 : 〈1647 年 12 月 15 日〉紀伊の国王の家臣が大坂で・／ここで文章は途中切れしている。／(次のページより) 渡した代金、丁銀 50、即ち、2 貫 150 匁と絹の上着 2 着を持参した。